

赤石 司田 繁元 太郎
編 同

神話梗概
天馬



岡崎屋書店

神話概論

天馬





CHRONOS AND RHEA.

緒言

- 一、この書は、歐米の文學、美術を研究するに便ならしめむこと、希臘、羅馬の重なる神話を記したるものなり。
- 一、希臘、羅馬の神話は、これに盡きたるに非ず、以下、追ひて世に出さむ日、遠きにあらざるべし。なほ編者は、つぎつぎに、スカンデナヴィア、エジプト、アッシリア、印度、アメリカ、メキシコなどの古傳説を、世に紹介せむと欲す。されば、この書は、その第一編とすらはせらるべし。

一、この書は、主として、材料を Rev. Hald. 氏訂正増補 "Palmer's Mythology. The Age of Fables" より取りたり、尤も、これに就きては、發行書肆、合衆國の W. Tilton 會社の承諾を経たるものなり。

一、この書は、印刷のみにいそがれて、その手續をなすを得ざりし「ガッツィットの閒話」「金毛の羊皮」^{トリス}「夜ふく風」^{スエビ}「猫」^{スエビ}「つら」の四編の外は、關外森林太郎先生の校閲をわづらはしたるものなり。編者は、ここに、同先生にひ向て、深き感謝の意を表す。

編者は、また、ここに、この書を編するに當りて、多大なる助力を與へられたる友人 ^{コニエーニ} (Coni) 氏、および、藤浪剛一

氏に感謝の意を表す。

一、希臘、羅馬神話につきての總説は、讀者の便をはかりて、これを卷末に附せり。

明治三十五年紀元節

赤司繁太郎
石川元季
しるす

天馬

目次

天馬	(シレフォンとスガヌヒ)	一	頁
美人像	(ロザリオ)	七	
黄泉の琴歌	(オルフォイスとアイリヤセ)	二三	
悲しき戀路	(ピラムスとチメス)	二五	
風によそぎ	(タファルスとプロクリス)	三三	
羊かひ	(エンサニオン)	四一	
堅き結び目	(ユルチアン・ノット)	四三	

桂樹 (アポロニダフ子) 四七

蠶斯 (アウロラニダメス) 五五

白頭翁 (ウエヌスラデニス) 五七

星のおもひ (オロキ) 六三

白露 (アウロラニダメス) 六七

向日葵 (ソラチー) 七一

ぬひ衣 (チロース) 七三

解さえぬ謎 (メソインクス) 七七

まごはる蛇 (ラオコーン) 八三

獵の女神 (サアナクテオニス) 九一

清きなさけ (アドメッスニアルセスチヌス) 九七

戀路の火影 (メロセリアンタル) 一〇一

冕星 (アリアド子) 一〇三

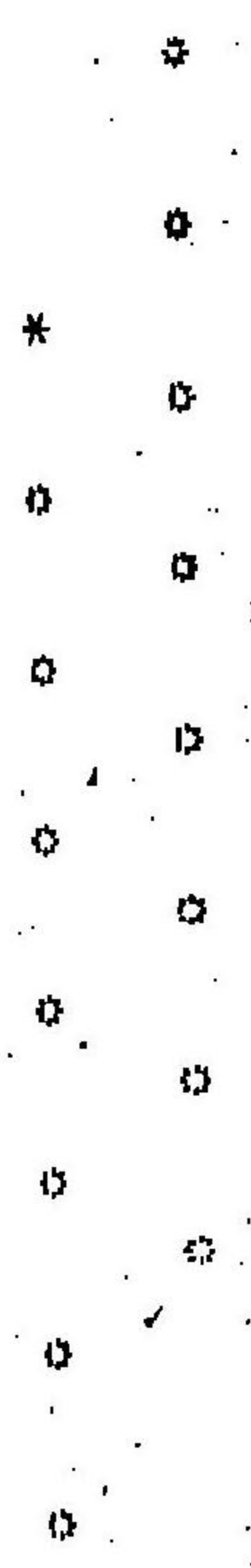
翡翠鳥 (サイクスニハルシロ子) 一〇七

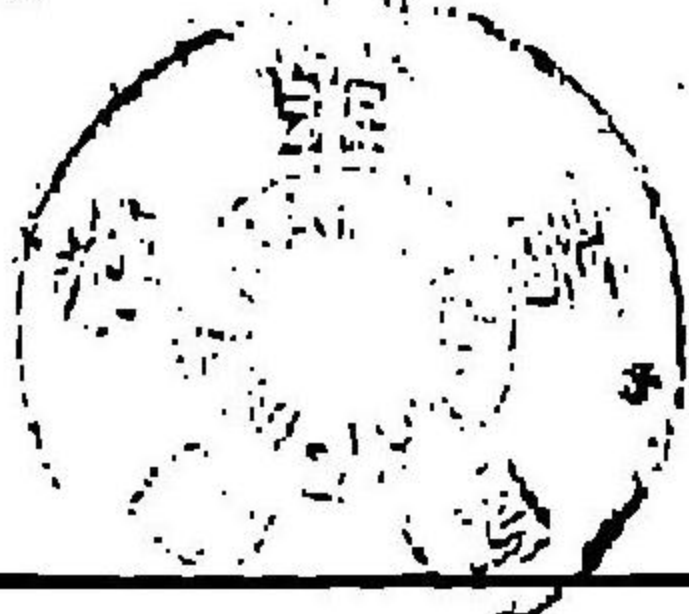
風信卿 (アポロニダメス) 一二七

金毛の羊皮 (オーソシメチマ) 一三一

葡萄かづら (キローナフヘルツタヌス) 一四一

抜ふく風 (ニクス) 一五五





PEGASUS.

總叙

羅馬人の神

オフィテウスの開闢説

一六三

一九五

二〇三

- | | |
|---------------|------------|
| 5 Muses. | 1 Perseus. |
| 6 Helicon. | 2 Medusa. |
| 7 Hippocrene. | 3 Pegasus. |
| (ἵππουκρήνη) | 4 Minerva. |



(ペレロフォンとペガサスと)

赤司 嘯花 同編
石田 春風

1 ペルシオスが²メヅサを³刎し時したる血潮地にそゞぎて、
 羽翼ある馬を生じぬ、ペガサスこれなり。 ⁴ミチルワ、これ
 を捕へて、以て⁵ミューゼに⁶遣りぬ。 傳へいふ、ミューゼが
 住めるヘリコン山なる⁷ヒポクリチの泉は、彼が蹴たる蹄の
 痕なりとぞ。

天馬

- 12 Bellerophon. 8 Chimera.
 13 Antea. 9 Lycia.
 10 Iobates.
 11 Proetus.

天 馬

二

火焰を吐く怖しき怪物あり名をキメエラといふ体の前半は獅子と山羊とを交へたらむやうに後半は龍に似かよひたりこの怪獸ある時リチアをさわがし、かば王イオバテス¹⁰はこれを滅さむとて人をもとめきをりしも彼の女婿ブレエツスの書を齎してその朝庭に來りし¹²ベレロフォンといふ勇敢なる青年ありその書中に記す所によればこの青年はかつて敗を知らざる勇者なるがかれフレエツスの妻アンテア¹³この戦士を慕ふが故にいかで謀りてこれを滅す術もがなどの意を含めたりさればベレロフォンは實に自ら滅すべき書を齎して來りしなりけりこれよりぞ自滅を

14 Porcidus.

知らずしてその使をなすを「ベレロフォン¹⁰の信書¹¹」といふ事は起りしなりける。さてその書を見たるイオバテスは元より情深き王なりしかばかくて彼を滅さむことのあたらしうも心苦しうさればとて女婿の請はた無下に却くべくもあらねば暫時思に沈みしがこよなき考を浮べ得つ彼を用ゐてキメエラと戦はする事これなり。乃ち彼にその由を告げ聞ゆればベレロフォンは快う諾¹⁴なひつさて戦に向ふに先だちて先づ之を妖術者ポライツスに謀るポライツス訓ふるに「ベガスを戦場に牽き行くべきを以てせり。さればベレロ

天 馬

三

フオンは、ミネルワの宮殿に於りて、一夜を連夜し丹心をこめて祈請を凝す。夢にミチルワ顯示したまはく、

『黄金のこの轡を携ふべし、さてピレネの井に赴くべし、さらば彼處にペガサス飲み居るべし。』

と、忽然として夢さむれば、身はありし乍らのミチルワの宮に、黄金の轡を現に残れる勇士は勇みてこれを取り持ち、教の如くピレネの井に至れば、黄金の轡に喜びて彼の傍に来れるペガサスを捕へ、その背上に跨るや否や、天馬は彼を空中に運び去りぬ、かくて、そこにてキメエラに會し、直に怪物を征服しをへつ。

キメエラ征服の後も、彼はくさぐさの誘ひと試みとに會ひぬ、されどペガサスの拯ありて、悉くそれに打ち勝つ事を得たり、さればイオバナスは、竟にかのが女をもて彼にめあはせて儲嗣となしぬ、かく想の外に思のまゝの榮華を享けしベレロフオンは、あさましくも驕慢の心深う、よからぬ事のみ多かりしかば、神の怒まのあたりに、彼が天馬に假して天がけらむと企てし時、大神ユピテル、蛇を送りてペガサスを刺さしめ給ひしかば、乗者は覆されてつひに跛となり、目さへ盲のたつきもなく、これより後は、人道を避け、只獨のみ¹⁷アライウスの野をさまよひしかど、しばらくにして、無慘の

死を遂げ果てたりとなむ。

天馬

六

美人像

(ピグマリオン)

常に婦人の缺點を看て、非難すべき事多しとなせるピグマリオンは、終に婦人を忌み嫌ひて、生涯獨身にて世を送り、結婚する事なかるべしと決心せり。彼はもとより彫刻家にて、象牙細工に妙なりければ、こよなう美しき美人像を彫みつ、生ある婦人もいかでその美に及ぶものあらむ、只沈黙にして謙遜なる動作のみは缺きてあれ、観るものたれかは彫像なりと思ふ者あらむ、實に宛然たる活處女なりけり。

1 Pygmalion.

天馬

七

ビグマリオンは、己れ乍らわが彫刻の妙なるに感じ、その上におのが手を置きて、生氣ありや否やを試みたること數々にして、自らその象牙なるを信する能はざるに至りぬ。青森の戀に溺るゝものゝ如く、光輝ある貝や、光澤ある石や、あるは寶玉、あるは翎毛、あるは琥珀、あるは花草と、こゝらの贈物を彼女に捧げて、まごころを表しつ。彼はその四肢に衣服を纏はしめ、指には寶石を嵌めしめ、首には頸環を飾らしめ、やがて耳には金環まばゆう、胸には眞珠かゝやき渡りぬ。そもや、衣服はいみじき人体の裝飾なり、されば裸体なりし少女の像は、衣服を得て益す人心を迷はしむべき艶麗を加

2 Venus.
3 Cyprus.

へぬ、こゝに於てか、ビグマリオンはナリアンの染色ある布を敷ける床上に彼女を安置し、名さへ妻と呼びなれて、柔なるをこそ妻の喜ばめと、いと軟かなる毛の枕の上に、彼女の頭を傾けしめぬ。

² ヲニエヌの祭近きぬ、よそほしき祭はキアルスにて行はれぬ、犠牲は捧げられ、祭壇は薫り、香氣空にみちみちぬ、ビグマリオンは祭壇近く進みよりて、いと嚴かにその前に立ち恭しう祈請するやう。

「能はざる所なき大神たち、希くばわが妻として、わが象牙の處女をさめの如きものを與へたまへ。」

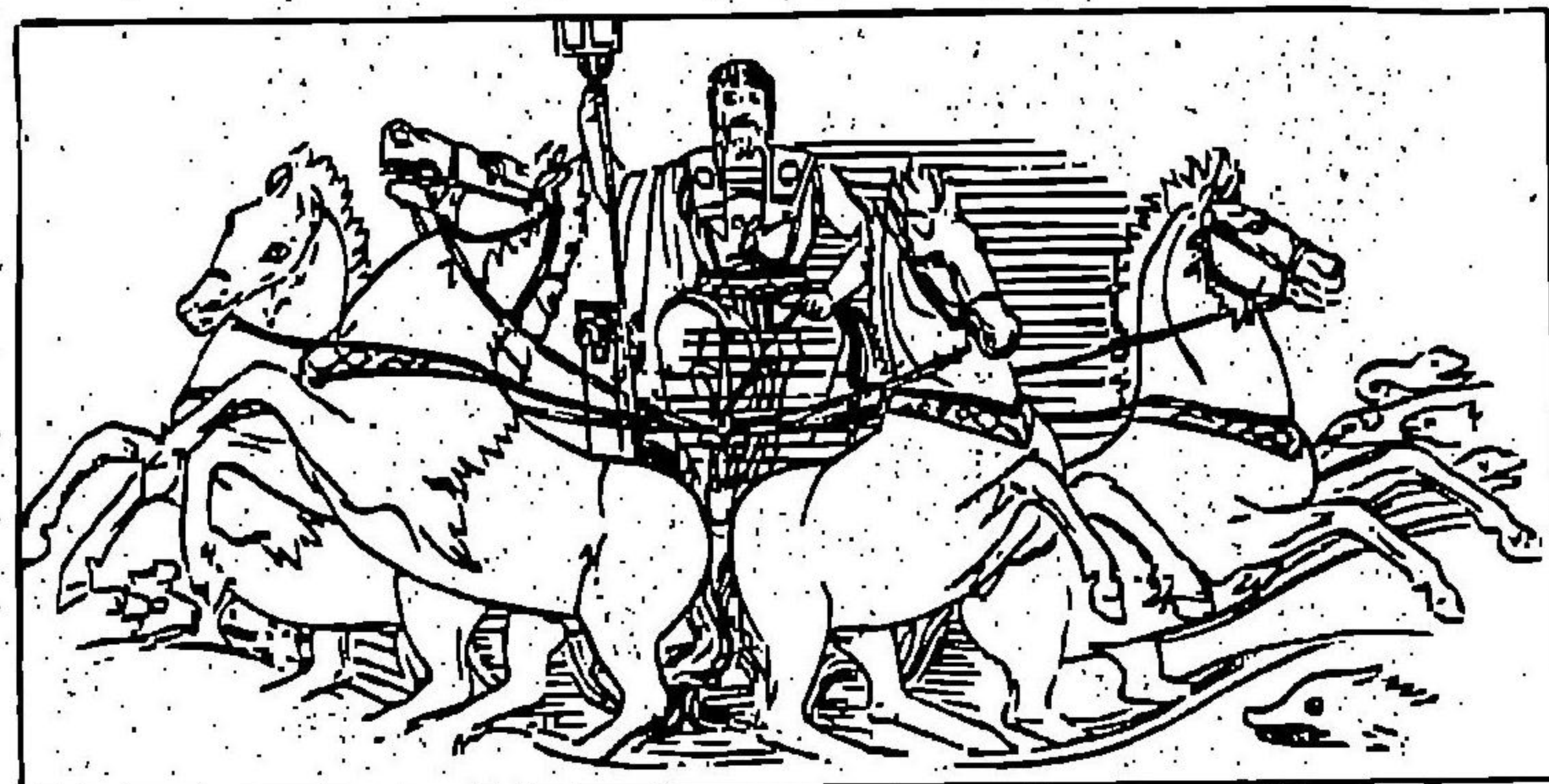
とされど、

「わが象牙の處女を興へたまへ。」

とは、さすがに言ひ得ざりき。祭に列したまふウエヌス
彼が祈請を聽きてその意を量らせたまひ、許容のしるし明
かに、祭壇の火三たび空にもえ上がりぬるぞかしこき。

ヒグマリオンは家に歸りて、直に彼の像の傍に赴き、床上に
傾きてその唇にくちつけすれば、こはいかに、世のつねの人
の温みあるを感じぬ、怪みて再びくちつくるに正しく生氣
あり、さてその手足に觸るればものより外にあたゝから、指
は、恰もヒメツスの白蠟のやうにて。かつはおどろき、か

つは悦び夢かうつゝ、かどわれながらだにいぶかしうて、再
三再四處女の像に手を觸るれば、活きたり、活きたり、實にそ
の像は活きてありけり、血管には熱血も流れり、今は何をか
疑ひ思はむ、彼はウエヌスに感謝しつゝ、燃ゆるが如き唇を
その處女に押し着くれば、おもはゆき頬はさと紅う、つゝま
しげなる眼をさへ開きて、なつかしき夫をうち守るよ。
ウエヌスは、この夫婦に幸福あらむことを願ひたまへば、や
がて二人の間にパフォス生れぬ。されば、ウエヌスに拵
げられたる市は、その名をこゝに取りたるなりとか。



ORPHEUS.

But soon, too soon the lover turns his eyes;
Again she falls, again she dies, she dies!
How wilt thou now the fatal sisters move?
No crime was thine, if 'tis no crime to love.
Now under hanging mountains,
Beside the falls of fountains,
Or where Hebrus wanders,
Rolling in meanders.
All alone,
He makes his moan,
And calls her ghost,
Forever, ever, ever, lost!
Now with furies surrounded,
Despairing, confounded,
He trembles, he glows,
A midst Rhodope's snows.
See, wild as the winds o'er the desert he flies;
Hark! Hermes resounds with the Bacchanals' cries.
Ah, see, he dies!
Yet even in death Eurydice he sung,
Eurydice still trembled on his tongue:
Eurydice the woods,
Eurydice the floods,
Eurydice the rocks and hollow mountains rung.

黄泉の琴歌

(オルファイスとオイリダセ)

テポロの神、ミューゼの一人なる女神カリオペと婚ひまし
 て、神子生れましぬ、オルファイスといふ。彼は父より琴を
 おくられ、それを奏する事を學びたりしが、その調微妙にして、
 聴くもの恍惚たらざるはなし。絃聲絶えなむとして絶
 えがてに、残の響いとすぢのこゝとなるを聴きては、豈に人
 といはむや、野山の猛き獸すら、その爪牙をゆるめ、その首を
 うなだれ、柔和なること羊豨にもまさりたらむ、饑になれり。

- 2 Hymen.
- 3 Eurydice.
- 4 Aristaeus.

豈に獸といはむや情無しといへど妙への音色に誘はれて
 は草木も靡きてや集ひくらむ干曳のいはほもやはらくへ
 し。
 婚嫁の式を司るてふヒメンの神、オルフォイスとオイリヂセ
 どの婚儀ことほがむとて招かれ來りぬ。されどヒメン
 の神は幸福の兆を示さざりきなかなか、彼の炬火は燃り
 さがなき涙眼をぬらしぬ。あはれ是のまさなのさとし
 や當りたりけむ、オイリヂセは婚儀の後間もなうその友の
 女神たちと野邊に逍遙せしが、牧人アリステウス、その美し
 き姿を見て、彼女の方へうかれ來たり、おそろしければ、たゞ

- 5 Taenarus.
- 6 Stygia.
- 7 Pluto.
- 8 Proserpine.

逃れゆくに、逃げまよふ草むらがくれ、毒ある蛇に足を咬ま
 れ、つひにはかなく失せはてましぬ。オルフォイス、悲しさ
 遣らむ方なく、かき鳴す琴に思をこめて、上界の神人におの
 がこよなき秋を訴ふ、されど、これにさへ心を慰めかねて、自
 ら黄泉の國に赴き、オイリヂセを索めむと思ひ決めぬ。
 かくて、テナルス海角のほとりなる洞穴より降りゆき、程な
 うスチギア王國の界に着きぬ、彼は生靈の群を経て、プルト
 とフロセルピ子との御座近う進みより、琴の音に連れて歌
 ひ出でぬ。

生きとし生ける現世の人とが、いつかは來べき黄泉の國の

神々たりわが處ならぬ願言きこしめせわれはタルタルスの
 秘事聞かむきて來しにはあらずまた蛇の衣三頭の犬の
 力ためさじきて來しにもあらず。
 われはたも愛の神のしるべなたのみに時ならぬ花のつぼ
 み毒ある蛇にかまれて果てし妻のゆくへもさめむきてこ
 そたどりきにつれ。ねばたまのよみの暗の彼面此向かけ
 てめでたき愛の御恵もてをさめますらふ神のみわざよ言
 ひつぎ語りつぎ諸人のたよへまつるおほ御業もあだな
 らじ。かしこみもかしこみてねさまつり請ひ断みまなま
 くばあが妻オイリヤセの玉のをふたたび聚きとめ給へま
 でわが世くだちゆく齡の糸持ちて定まる運命來らむとき

- 10 Tantalus.
- 11 Ixion.
- 12 Danaus.
- 13 Sisyphus.

吾れまたこのよみの國スチキアの地にまうて來むさらば
 吾れなごかほみことこのまにく從はさらむ吾が妻の命も
 また請ふべからし故れ願くば今のうつらに思ひ妻かへさ
 せ給へ幸なき吾が身あはれみ給ひてプロセルピ子よあは
 れみ給ひて吾が思ひ妻かへさせ給へ黄泉の神プルトの大
 神。

むせび泣きつゝやうやうに歌ひをへし時は萬靈の輩涙を
 そそぎ永久に濁くてふタンタルスさへ水を求むるつとめ
 を止めイクシオンの輪さへ靜に立ちたゞ禿の醜の鴛さへ巨
 人の肝臓啄むことを怠りダナウスの女たちさへ篩に水を
 ぐ漿の手を止めシシプスの岩上に踞して妙なる鬨を聽

天 馬

14 十八

き居たりき、加之かつて涙を出し、ことなきフウリエ等の類も、この時初めて涙ひぬとなむ。プロセルビチはもとより冥府の女王なれど、さすが女性の心弱さは、いかでこの願言を拒み得じや。ブルトもこゝに許を與へつ、オイリチセは召し出だされて、よろめきながら足引きつゝ、新たに着きたる亡者の群の中より出で來りぬ、さて上界に到らむまでは、ゆめ彼女を願ふなど、嚴しうおきてられて、今は疾う心のまゝに連れゆく可しとぞ許されける、冥官のおきてたそろしければ、險しき暗路をたどるゝも、言葉は出ださず、オルフォイスは導き、オイリチセは隨ひ、いそぎいそぎて今や

まさにここやみの世をのがれ果て、上界の氣に觸れなむとす、この一刹那、オルフォイスは心ともなく吾が妻おくれす隨ひ來つや、とその後ろ邊をかへりみぬるこそ、生死の道のわかれぢい、とあさましう、うたてかりしか。實にまこと、この時にしも、はしきオイリチセはもと來し方へ運び去られぬ。悲しい哉、冥路昏々たり、二人は互に手をさしのめて、わかれを惜まひとすれど、亦あだなりき、オイリチセは再び近きぬ、されど、されど、彼女などかは夫を責むべき、かの一瞥こそ眞心の切なるに出でしに非ずや、

「さらば、さらば。」

天 馬

十九

と打叫ぶ妻の聲はオルフォイスの耳に達せざりし程に、を
ちかたさして連れ行かれぬ。

オルフォイスはオイリチセの後追ひゆき、今一度冥府の神の
恩恵を乞はまく欲しぬ、されど無情の船人は彼を拒みて渡
船を許さざりき、されば七日のほどを川の邊にさまよひも
とほり眠ることなく、食する事なく、きびしく¹⁵エレプスの刻
薄なるを難じ、滿腔の鬱悶と斷腸の悲愁とを歌ひて、岩と山
とに訴へ、心をつくして調べければ、たけき虎さへ魂を飛ば
し、堅き樫さへ¹⁶動ぎ出でぬ。

これより後、彼はふつに婦人を近づけず、たのが悲みをせめ

てものかたみに、をりたく柴の夕げむりを思ひ出ぐさの獨
り住みて、うき年月をおくりぬたり。かくて¹⁶トラシアの
女子ども、命をかけて戀ひ慕ふといへど、一人として彼の拒
絶に逢はざるはなし。彼の女ども、今は木石にもまして
情なき人の心を知り得つ、中にもをどめ子の一人は¹⁷パッキユ
ス酒の儀式に激せられて、

『かしこの憎むべきものを見よ！』

と打叫びつゝ、彼を目がけて手鎗を投げぬ、されど、かれの舉
の音の達する處にて、鎗はかひなく地に落ちて、足の下に横
はりぬ、石をも抛ちしかど、それさへ亦かくの如くなりしか

ば、たけり狂ひて、女子どもは琴の音を妨げむと叫び罵る聲
 おどろくしう、遂に樂の音色を没し、またもや鉛を投げて、
 思ふがまゝに彼を傷つけぬ。血潮を見ても飽かさりけ
 む、四股を引き裂き、彼の頭と琴とをへブルス河に投げ入れ
 ぬ。オルフォイスは流れながらに、悲愴の音を奏でしかば、
 岸はその哀音にこたへて、また鬱愛の響に咽びぬ。ミユ
 ーゼたちは、彼の遺骸を拾ひ集め、リペトラの地に埋葬しぬ。
 故れ、是の時より是の處は、殊に鶯聲綿蠻の美しきを聞くこ
 いふ。ユピテル彼の琴を星宿の間に置きぬ。さて彼の影
 は、再びタルタルスに至り、そこにオイリヂセを見出で、

濃かなる愛の腕もて相抱き、共に樂しき野邊をさまよひ、あ
 る時は、また彼女に導かれて、願すれど相失ふのおそれもな
 う、かたみに平和をたのしむとなむ。

- 1. Semiramis.
- 2. Pyramus.
- 3. Thisbe.

悲しき悲路

(ピラムスとナスベ)

セミラミスの御代に佳人才子あり、男をピラムスと呼び、女
 をナスベと稱し、バビロン中、佳麗彼等に及ぶものなかりき
 とぞ。さて是の兩人は、親ごちの家さへ相隣りければ、い
 つしか睦じう思ひかはすに至れり、されど花開きて風雨多
 く、彼等の兩親はこれを喜ばず、堅く遇瀬をせき止めぬ、妨あ
 れば愈募るは戀路の習さて、今までは心づかさざりし家を隔
 つる石垣の隙を見出でつゝ、そこより香しき愛情の呼吸を

ぞ忍ばせける。かく日出ては石垣に寄り添ひ、日暮ては情濃かなる口つけを彼は彼方に此は此方の石垣に印して、せめてもの心遣りとは爲しつ。曉の神アウロラ星を追ひて、日の影草葉の露を干す頃、彼等は例の處に來りぬ。遇ふにつけては、心に任せぬうき身の運命を語り合ひて、さて終に夜來り、人静まり、守る者の眠り果てたらむ時、竊に脱け出で、野に行かむ。彼處にはニユスの墓と呼ばれたる記念碑あり、早く來らむものこそその傍なる冷泉の汀に立てる。白桑樹の下にて待ち合せめと交り置きし。待てば一秒も數時間の心地して、今日は暮るゝ事などかくは遅き。

されど、遂に太陽は水に没して、夜は水よりぞ生じける。チヌベは人に知られじと心して脱け出でぬ。空は星月夜きらきらとして、夜氣沈々たり、彼女は被衣ふかう面を包みて、歩み静に木蔭に近づき、戀人の來るを待てり。をりしも一片の暗雲月を蔽うて、朦朧たる微光の裡を動き來るものこそあれ。そを何物とさきと見やるに、今や人を屠りて、臙は鮮血淋漓、その渴を愈さむとて、泉に近づく牝獅子なりき。この有様に愕きたるチヌベは被衣の落つるも知らず。で岩窟の中へと逃れたり、獅子は思ふがまゝに渴を愈し、後おのが森へ歸らむとするに、地上に件の被衣あるを見出

で、寸断に裂き破り口邊の血をこれに染めぬ、かくとも知らず、希望に満てるピラムスは、時を失して速しく馳せ來り、かの契り置きし所に至れば、思ふチヌベは影だになく、夜目にもしるき砂眞路には、獅子の足跡歴々として残れり、喜悅に彩りし頬も青ざめ、傍を見れば寸断の被衣、碧血をいろに腥きあり、

『あゝ不幸なる女よ、御身をしてかくならしめしは、全くわが罪なり、わが何ならぬ身より、貴き御身は先づ生贖となり果てしか、われも後れで後を追はむ、御身を誘うてかゝる危き處に來させしかも守

護すべきわれは在らず、許せわが罪許せ戀人、岩にかくる、諸の獅子よ、出で來りてこの罪深き躰を汝等が身にかけてよ、』

と、狂氣の如く叫びつゝ、被衣を取り上げ、約束の木に之を運び、接吻と涙をもて濡しぬ、不覺の嘆に沈みたるピラムスは、腸九廻今はせむ術さへ希望さへ盡き果てたり、生きたて甲斐あるこの身かは、

『わが血も御身の衣を染めなむ、』

といふや否や、短劍するどく胸先目がけて貫きたり、湧き出づる血のからくれなるは、かの桑の實の白かりしを、凡

て深紅の色に染め、流れて地中に沁みし血は、根に達して幹も枝も、盡く紅ふかき色とはなりぬ。
チスベは先に岩窟に隠れて、今まで怖れをのき居たるも、さりどて戀人や望を失ふらむと、臆しながらに歩を移しつ、定め場所に至りて見れば、白桑變じて紅色となれるにも、しや處を誤りしにはあらじかと危ぶみつゝ、進み行けば、苦痛に呻きて横はれる人あり、思はぬ様に愕然として逡巡せしが、また何となく心さわげば、眼を定めて、とみかうみすかし見れば、あはれ戀しき人なり、裂くる計りの心動を抑へて、生氣なき体軀を抱き、その傷口に涙を流し、冷たき唇に炎ゆ

る口おしつけ、おしつけ、

「ピラムスよ何事ぞ、如何なればかくはなりし、われに答へよ、かくいふは御身のチスベなるものを、戀しの君よ、わが聲を覺え給は、頭を上げませ、愛する君よ。」

と、涙を揮ひて絶叫すれば、チスベの名を聴きしピラムスは一度は瞑れる目を開きしが、再び閉ぢては復開かず。かゝる間に、チスベは己が落し、被衣の血潮に染みたるが寸々に裂かれ、その傍には、鞘を離れし短劍の横はれるを認め、初めてピラムスの自殺を知りぬ。

「御身を殺し、は御身が手かしかもわが爲めに、わが愛情よ御身のに劣らざれ、われも死して御身に續かじ、われ等の親はわれらの願を許さざりき、只死と愛とこそ銚へにわれらを結ぶなれば、希くは同じおくつきに埋められむ、汝白桑よ、死の記念たれ、汝が果實は永久にわが血の記念たれ」

と言ひも終らず、あはれ同じ劍に胸を刺しぬ。かくて、兩親は彼等が生前の請を容れて、二つの遺骸は同じ塋に葬られぬ。神も之をよしと見たまふ、さて、其時より今に至るまで、かたみの桑は、紫紅色の實を結ぶなりけり。

風のそよぎ

(ケファルスとプロクリスと)

- 1 Cephalus.
- 2 Aurora.
- 3 Procris.

ケファルス¹は風手嫺雅、容姿潇洒たる青年にして、資性頗る活潑に、いたく遊獵を好みぬ。彼は常に、味爽獵に出で立つを例とせしが、曙の神アウロラ²、こよなき姿にめで、此青年を戀ひ、遂に彼をゐてゆきぬ。されど、ケファルスには、結婚の後、いく程もなき新婦のあるありて、プロクリス³と呼び、獵の女神ディアナの寵を蒙り、いかなる敵にも打ち勝つべき獵犬と、決して的を外すことなき投槍とを贈られ、これ等を

もて、夫ケッアルスに與へたり。新婦を愛するの情濃かな
るケッアルス、いかでアウロラ^ウの愛を受けむや、女神が辭をつ
くしての勝ひにも従はざりしかば、女神は終に怒を啣み、

「往け、人非人、往きて汝の妻を愛せよ。されど、わ
れ預言す。汝かならずいみじき不幸に遭ふべ
し。」

といきまさき荒う、彼を放ちぬ。かくて、ケッアルスは家にか
へり、前にもまして睦じう、樂しうまごむの日を送りぬ。

女神は、憤怒の情、火災々として抑へ難く、性質惡しき狐を遣
し、他迄田園を荒らさしめぬ。獵夫等は、いかで之を生擒

せむと争ひ、犇めきしかど、彼等の盡力効を奏せず、いかなる
獵犬も一として彼に及ばず。終に彼等は、ケッアルスの許
に來りて、かの有名なる獵犬レラプス⁴を貸さむことを乞ひ
ぬ。かくて、放たれたるレラプスは、快走電の閃くが如く、
追ひに追ひ、かけりにかければ、追はるゝ狐も石の火のごと
く、砂上に印する足跡なくば、なごかは彼等のゆくへを知ら
む。ケッアルス、さては、多くの者ども、丘に登りて、彼等を覽
れば、狐は例のさかしら深う、或は圓形に走るとすれば、ある
は横さまに滑りゆき、退くと見れば、前へ進み、神出鬼没、犬も
劣らず之につゞきて、口を開きて、踵にせまり、咬まむとすれ

ば、この時おそくかの時早う、狐は跳びて空しく空をつくのみなれば、ケッアルスはこゝぞ投槍を用うべき所なると、かの槍に手を觸るれば、俄然狐も犬も共に、その歩を停めてふつに動かす。實にこの兩箇にかばかりの力を與へつる天の神は、勝敗を喜びたまはざりけむ、ありし乍らの姿のまゝに、彼等を石と變らしめぬ。視るもの孰かはこそ石とおもはむ、一は將に吠えむとする如く、他は將に跳らむとする姿勢あれば。

ケッアルスは犬を失ひて、一度は悲に堪へざりしが、なほ稀代の槍あれば、朝早う起き出でては、伴をもつれず、森に、丘に、獵

に行きぬ。獵にも疲れ果て、暑さはた堪へ難さをりしも

は、冷泉湧き出づる木陰に憩ひ、上衣を草にぬき捨て、そよぶく風のやはらかなるを、心地よげに聲高う、

「來れ、いとしのそよかせ、來てわが胸を扇げ、來てわ

れをもやす暑さを去れよ。」

と獨言つ時もありき。たま〜通りかゝりて、この言葉

を聞きける人、風にもものがたることは思はざりけむ、必ず婦人

に來よといふなめりなど、心あてに決めてケッアルスの妻、

ロクリスに、かくと語りぬ。まことにや戀は輕信し、易し、

ロクリスいたく驚き、殆ど氣も消えうする計りなりしが、思

ひ直して、

「それはまことならじ、まのあたり見るにあらずば輕

々しうはいかで信せむ。」

とかくていつもケアルスが出で行く時をまちつけて、その後より木の間がくれに跟ひゆく、ケアルスは素よりかくと知る由あらねば、獵に疲れてみどり深かなる汀に横り、又もや、

「來れ、いとしのそよ風、來てわが胸を扇げ、來てわれ

をもやす暑さを去れよ。」

と、獨言したるをりしも、藪の中に、むせび泣くらむ響を聞き

ぬ。野獸なめりと想ひさだめて、傍の投槍とるより早く、音する方へ投げやれば、手答たしかにうち中りぬ、あゝ中りしは獸にはあらで人なるを、しかも最愛の妻ならむとはいかで思はむ。ケアルスは叫びし方に走せ行き、投槍の痛手に鮮血淋漓たるプロクリスを見出でつ、抱き起してわき出る血しほを止め、こは如何にせむと、悔の八千度百千度おのが過ぞくやめども今はかひなし、プロクリスは弱りたる眼を見開き、夫をながめて息も絶々に、

「御身もしわれを受したまは、希くはわが最後の

願をゆるせ、わが夫、決してかの惡むべきブリーズ



DIANA.

天 四

(軟風)と婚結したまふ事勿れ。

と實にこの一語に、總ての秘密は解かれぬ、されど嗚呼今は
遅かりさかの女は夫の腕にかき抱かれて、いとも靜に事の
眞實をまよふのが嫉妬のむなしかりしを思ひつゝも、とこ
しなへなる眠に就きぬ。

四十

- 1 Endymion.
- 2 Latmos.
- 3 Diana

羊かひ

(エンデミオン)

エンデミオンは、ラトモス山¹に於て、羊を牧する美少年なり
 き。ある静なる良夜、ディアナ³(月の女神)は、下界を瞰ひて、彼
 の眠れるさまを見たり、をどめの神の冷かの胸も、彼がくら
 べむやうなき美しさに温められ、天降り來て、彼に接吻^{くちつ}け、眠
 れる程をうち守りきこよ。

1 Midna
2 Gordius.

堅き結び目

(ゴルデアアンス、ノット)

¹ミダスはフリギアの王なりき。その父は²ゴルデアウスといひて、初め貧しき田舎人なりしが、人民は、その未來の王は車に乗りて來るべしといふ神託により、彼をあがめてその王となしぬ。ゴルデアウスは、人民が神のみことばをおもひめぐらせるをりしも、そが妻子を携へ、公道を経て、車に乗りてぞ來りしなりける。

ゴルデアウス王となりてより、その車を神の御前に捧げ獻り

天馬

て、そを其處に縊すび置きぬ。これなん彼の名に高き解く
べくもあらぬ難事といふこゝろを表はすゴルヂアン、ノッ
トの故事ことばの基なる縊すび目なりける。かくて若しこれを
解くものあらば、その人こそ全亞細亞の主たるべけれど神
託ありき。されば、こを解かむとせしものいと多かりし
かど、されど、一人の成功せしものもあらざりき。時しも
あれ、アレキサンダー大王は、連戦連勝の餘勢をもてフレギ
アに來りぬ。彼はこの縊すび目のことをきゝて、その熟練
を試みぬ可く、力を盡し、かども、縊すび目は解け難かりき、今
は大王も得堪へざりけむ、取り佩く劍をぬくよと見えしが、

その縊すび目を切り放ちぬ。さてその後、彼れが全亞細
亞を權威の下に威服したるとき、人民は、皆神託の虚しから
ず、解かむものこそ全亞の主たるべけれど、予言のしるし
ありしをたゞへあへりきとなむ。



APOLLO.

- 1 Parnassus
- 2 Python
- 3 Apollo
- 4 Cupid

桂 樹

(アポロとダフネ)

パルナ¹ス山の洞穴に潜みて、數多の人を惱まし、巨大の毒蛇²ピートンを射殺して心おこれるアポロ³は、クビド⁴が弓矢を手まさぐるを見ていへるやう、

「やよ、かたくななる少年よ、かゝる武器を遊ぶは、この業ならずや、そは早うふさはしき人の手に委せてあれ、われを見ずや、われはその弓矢をもて毒蛇を征伏せり、火把こそ汝には似つかはしけれ、汝

は只汝の炎を燃して、わが武器にな觸れど。」

と、いゝあなづらはしう叫びぬ、さすがクビドはウエヌスの子なれば、少しもわるびれたる所なくて答へけらく、

「アポロの神、御身の矢は實になへでの物を射るべ

し、されどわが矢こそ御身の矢が射ることあたは

ぬ御身をも射るべきなれ。」

と、さてバルナススの岩の上に屹と立ちあがりて、その腋より二本の矢を取り出だせり、一本の矢は黄金造りにして射られしものは愛の心を起せども、他の一本のは鉛の鏃にて鈍う射られしものは愛を厭ふとぞ、彼は鋭き黄金の矢もて

アポロを射、鉛の矢もて河伯ペノイスの女ダフテを射たり、これよりアポロはダフネを慕ひ、ダフテは戀といふ事のおもひをだに、蛇の如く忌みおそるゝに至りぬ。かくて、數多の戀人ども皆ダフテを需むれども、悉くこれを拒みて、遊獵にのみ耽り居たり、

「早う夫定めして、初孫の顔見せよ。」

と、父はいへど嫁ぎの道をかじこき罪と思ひ決めたるダフテは、たゞ顔あからめてかく答ふるを常とせり、

「父よ、妾はチアナの如く婚を求めで止みなむ、許したまへ。」

とのみ。

アポロは、ダフネが黄金の髪カミの、よさやかに肩カミのあたりへ垂れかゝるを見て思へり。

「亂れながらだに、かく美しかれば、整へたらむ時は、
とも如何なるべき。」

と、彼はダフネの眼メの星ホシのやうに輝くを見たり、唇クサシの蔷薇バラの色イロに彩イロられたるを見たり、肩カミまであらはされたる腕ウデの美しきを見たり、さて彼女を慕慕ひ、戀恋ひ愛愛して、いかでわが者にしてしがなと、心ココロはやりて彼女の後アトを追へば、はやての如く逃逃げれ去りて、囑願おまかせの暇いとまだにあらしめざりき、後あと追ひながら呼び

て曰く、

「暫し待て、ペノイヌの女よ、われは御身の敵にては
あらぬを、羊ヒツの狼オオカミを恐るらむ如く、鶴ツルの鷹トビにあひた
らむ如く、さなわれをばうとみ逃れ、石イシに蹴うき身
を傷くともわが故ことなりと思ひては心ならず、やよ
靜しずに走れ、われも靜しずに走るべきを、われは田夫タノウなら
ず、僮人トウジンならず、ユピテルはわが父にて、デルフォース、テ
チドスの主ミなり、現在いまも未來あしたも總いって知らざるはな
し、又われは歌ウタの神カミ、翠スズクニの司つかさどなり、わが矢やは的的を外はず
となけれど、あゝ、わが矢やよりなほ不幸ふしぎなる矢や飛とび

來てわが胸を貫きぬ、われは醫藥の神なり、方藥の
徳一として知らざるることなけれど、あゝ、醫藥も及
ばざる病に犯されぬ。』

と、されど水神は止るべくもあらず、その逝ぐることを益々急
にして、風はその衣を翻し、その髪を亂す、アポロは戀人が墮
き倒れむを憂へつゝも、クビドにさそはれて追ふ事一層の
早さを加へぬ、さながら獵夫の野兎を追ふが如く、一は憐愛
の翼により、一は畏怖の羽に乗りて、追ふもの急なれば、追は
るゝまた愈々急に、されどアポロの力や勝りけむ、彼の呼吸
は、おはや將に處女の髪に觸れむとす、ダフ子は今や力盡き、

踏^た跌^ふれむとして父の神を呼び、

『助けよ、父ペノイス、地を開きてわれを呑め、さらす

ば形を變へてこの危難を救へ。』

と、その言葉終るや否や、四肢硬う、胸は柔き樹皮に包まれ、そ
の頭髮は木葉となり、腕は枝となり、足は地に入りて根とな
り、顔は樹の梢となりて、こゝにのみぞありし姿は残れる、ア
ポロこれを見て大に愕き、その幹に觸るれば新しき樹皮の
下に彼女の肉を感じぬ、彼は枝を抱きて樹に口つけ、絶望の
餘り叫びていふやう、

『御身はわが妻たると能はざりしかど、どこしへに

わが愛樹たるべし、われは御身をわが冠とせむ、御身をもてわれはわが琴と箴とを飾らむ、今より後、もし羅馬のますらをが戦に勝ち、再び都に凱旋せむ日は、彼等の額に御身をもて装はれむ、永久の青春はわがものなれば、御身もまた常に緑なるべし、
 うの葉亦とことばに汚るゝ事なかるべし。」
 と、今は、ダフネは桂樹に變じて、アポロが恵に首を垂れぬ。

蝨斯

(アウロラニチトヌス)

- 1 Aurora
- 2 Troy
- 3 Luornedon
- 4 Tithonus

曙の神アウロラもまたその姉妹、月の女神のやうに、この地の人を戀ひしことありき、その最も愛せしはトロイの王ラオメドンの子チトヌスなりき、故れ、女神は彼をぬすみどり、ユピテルに請ふに、彼をして不死ならしめむ事を以てしき、されど惜むらくは、その賜物に加ふるに、常に青春の齡をかさむを願ふをわすれたり。こゝに於てか、彼はやうやくに老いもてゆくを、アウロラは飽かず思へど如何はせむ、髪

さへ灰色に變れば、彼と共に棲むも厭はしうなりぬ、さはいへ、彼は猶女神の宮にすみ、喜びてアムプロシヤ草を食ひ、天人の衣を着けたり。かくありありて、果は手足さへ叶はずなりければ、女神はかたく室内に閉ぢ籠め置きぬ、その後、彼の弱りたる聲、ときどき漏れ聞ゆしが、終には彼を虫の姿に變じぬ。 蘇斯これなり。

白頭翁

(ウエヌヌとアドニスと)

- 1 Cupid
- 2 Venus
- 3 Adonis
- 4 Paphos
- 5 Cnidos
- 6 Amathos

クビド¹の矢に射られし者は、戀すとぞいふなる。ウエヌヌ²ある日その子クビドと共に遊び居しに、クビド彼の黄金の矢もてウエヌヌの胸を傷けたり。さてその矢は直に抜き去りしが、思ひの外に瘡痕深く、未だ全く癒えざる程に、アドニス³を視て、大に彼を戀ひ慕ひぬ。パフォス⁴クニドス⁵アマトス⁶の輩は、實にも金銀珠玉に富めり、されど彼等のいみじき熱情もてだに、ウエヌヌの心は癒はれざりし也。

かく彼女は神たちの住みませるオリムプスにも止まらずして、たゞアドニスの後をのみぞ追ひたりける。アドニスが好む所は、やがて是れウエヌスの好む所なれば、獵の女神ディアナの如く装ひつゝ、野邊を山邊を、アドニスと共にさまよふ。かくて常にアドニスを警むらく、

「猛からの獸に向ひてこそ勇敢なるべけれ、猛々しきものに對して手強からむは安全の道に非じ、危険に莅まばわが幸福は破れなむ、自然が武器を與へたる獸にな觸れたまひそ、彼の獅子や野猪や、かくの如きは、われウエヌスを迷さむほどのやさし

き青年が觸るべきものに非ず、われはこよなう彼等を惡む、故如何にと問ふを休めよ、見よ、われに従はざりしアタランタ、ヒポメネス等のまつろはぬ報として獅子に變せられたるならずや。」
と、かく警め置きて後、ウエヌス白鳥に牽かれたる車に御して、大空高う馳せ上れり。されど、アドニスは彼女の忠告を用ゐず、幸に獵犬、野猪を追ひ出し、かば手にする槍をぞ投げ與へける。ねらひ過たず、槍は猪の横腹を傷けしかど、却て臆もて之を抜き去り、豁然としてアドニスを襲ひ來る。彼は大に愕き怖れ、逃げ走りしが、遂にそれに窘迫せ

られ、鋭き牙もて傍腹を貫かれ、あへなく平野に屍を暴しぬ。
 この時恰もウエヌスが白鳥の羽、未だキブルスに達せざる
 時なりしかば、空中を通じてアドニス¹¹が嗚咽の聲を聴き、周
 章して地上に還れり。近づき見れば最愛のアドニス、屍
 を血に染め、呼吸既に絶えたり。急ぎ降りて、慟哭胸を拍
 ち髪をむしり、足すりすれども今は甲斐なし。彼女は運
 命を責めて曰く、

「あゝ、彼等の勝利は一部分なるべし、わが悲歎の記
 念は未來に續くべし、わがアドニスよ、汝が死の光
 景、わが悲歎の状況、年と共に新なるべし、汝が血は

花に變じ、その慰新は誰しの人も羨み能はざらむ。」
 と、かくて神酒を血に注げば、雨滴の海に落つるごとく、泡沫
 立ちあがり、一時間にして榴花の赤きか如き花をぞ生じけ
 る。花開くや、一陣の狂風來りて、瞬くひまに花を散らし
 ぬ。されば、その花をアテモ子（白頭翁）即ち風花と名け、實
 に咲けばかつ散るはかなき運命の花なりけり。

5 Merope

- 1 Orion
- 2 Neptune
- 3 Chios
- 4 CEnopion

星のおもひ

(オリオン)

オリオン¹は子²プテユヌの子にして、容貌端嚴、臂力いと優れ
 たる獵人なりき。父は彼に海を渡る力を與へぬ、或はい
 ふ、海上を歩むの力なりと。
 テオス王³エーノピオン⁴の女にメロー⁵あり、オリオン彼女
 を慕うて婚儀を申し込みぬ、さてその情人へのつとにせむ
 とて、島の野獸を獵り、そを携へ行きぬ。されど、エーノピ
 オンは容易くその請を許さざりしかば、彼は暴力を以て彼

夫 馬

6 Vulcan
7 Kedalion

天 馬

六十四

女を得むとせりき。この行爲を憤れるエーノビオンは、怒に乗じてオリオンに痛飲せしめ、酔ひしれたる間をうか
とひ、彼の視覚を奪ひ去り、然る後之を海邊に棄てぬ。盲
目の勇者は、シクロプスの鎚音をたよりにレムノスに達し、
ワルカンの鍛冶場に来れり、彼は憐憫の心を起し、そが助手
の中よりケダリオンを擇びてオリオンの案内者と爲し、日
輪の住所にぞ導かせける。オリオンは肩にケダリオン
を載せたるまゝ、ひたすら東の方へと進みけるが、彼處にて
日神に會し、視覚を恢復せられたりき。
この後、彼はチアナ女神の愛を蒙り、獵夫として彼女と共に

8 Arolo
9 Sirius
10 Pleiads

天 馬

六十五

居り、終には結婚をさへ望まるゝに至れり、チアナの同胞、日
神アポロはこれを忌み、屢々彼女を誑めたり、されどその甲
斐あらざりき、一日オリオンがその首のみを水上に出だし
て、海を泳ぎ渡るを見、アポロは其の姉妹の神につけて曰く、
「なにもこの命、彼處の黒點を射能はざるか。」
とかくて女神は不幸の矢を放てり、浪はオリオンの屍を岸
に浮べ來りぬ。チアナの悲傷痛悔は實に見る人ごとの
同情を惹き起し、なり、彼は遂にオリオンを星となして、帶
劔獅子の皮及び棍棒を有する巨人として現れしめき、彼の
犬シリウスは彼についき、ブライアド¹⁰彼が前に跳べり。

- 11 Atlas
- 12 Jupiter
- 13 Electra
- 14 Dardanus
- 15 Troy

フライアッドはアトラスの女等にて、¹¹チアナを護りの侍女なりき、オリオンは彼等を見て懸慕の心を起し、その後を追へり、窘迫せられたる彼等は、その苦を逃れむ爲めに姿態を變せむことを悞願せり、¹²ユピタルこれを憐みて、¹³鶴ハシとなし、而して後、復、星宿となしぬ、その數合せて七なりと雖も、見ゆるは只その六のみなり、¹⁴そはその中のエレクトラは、その子ダ15ルダヌスの創建せしトロイ市の滅亡を見るに忍びざるが故にして、さればこそ、¹⁶そが姉妹等の容顔もまた青白きなれど。

白 露

(アウロラとメムノン)

- 1 Memnon
- 2 Ethiopia
- 3 Nestor
- 4 Antilochus

¹メムノンはアウロラ及びチトヌスの子なり、²彼はエチオピアの王なりき、さてオセアン河の岸地の極東に住みぬ、³トロイ戦争の時、彼はその父の血族を助くべく、⁴をしくも戦士を率ゐて來りぬ、⁵メムノンのトロイに來るや、長途の疲やすむる隙なく、直に戦場に馳せ向ひしが、その猛勢に當りかねて、⁶チヌトルの子にて勇敢の聞え高きアンチロヒユス、⁷彼が手に倒れ、希臘軍

9 Pleiads
 5 Achilles
 6 Pnylagonia
 7 Esepus
 8 Hours

天馬

六十八

まさに逃れむとせしをりしも、アヒレス⁵あらはれ頼勢を挽
 回す、かくて暫しが程は、勝り劣らぬ兩人の勇士が、雌雄いつ
 れとも決せざりしか、アウロラの子の天運や拙かりけむ、終
 に勝利はアヒレスに歸し、メムノンは倒れ、トロイ軍はくづ
 れぬ。

アウロラ女神は空の彼方⁶にありて、その子の危険を目撃し、
 憂慮措く能はざりしが、つひにメムノンの倒れたるを見は
 らからなる風伯に命じて、屍をバフラゴニア⁷のエゼプス河
 畔に携へ來らしむ、たそがれの頃ほひ、女神はアワー⁸及びプ
 ライアッドに侍かれて、天降⁹り來つ、その子の死をいたみ慰

10 Night

嘆の涙にくれぬ、夜¹⁰の神、アウロラの心をおもひやりて雲を
 みそらに懸しぬ、もろもろの物みな彼女の爲めに憂ふ、エチ
 オピア人¹⁰は「處女の森」のいさ、川邊に墳墓¹⁰を起しぬ、エビ
 テルはまた、葬の火の光と灰とを、悉く鳥に變じ、二群となし
 て火中に落つるまで、火上に戦はしめぬ、されば、年毎に、彼が
 死の記念日、至るたびに、彼等鳥はかへり來ては、その葬に列
 るとなむ。アウロラも亦かなし子のうせにし、嘆今に盡
 きで、こぼるゝ涙は朝の草¹⁰の上に、白露とこそおきわたりけ
 れ。

天馬

六十九

Clytie

向日葵

(クリチー)

水の女神の一人なるクリチー、アポロを見て、そらに眷戀の心を起しぬ、されどアポロは彼女を顧る事なかりき。女神はいかで太陽神のあはれみを惹かむとて、ひねもすあらがねの地の上に坐し、球なす髪を肩にゆりかけ、日の九目を一粒の食だに一滴の水だに口に入れず、おのが涙と冷き露とを糧にはして、彼が茜さす空たかう昇る時には東を望み、西の山ぎはに殘の光を留めてかくるゝまで、たえてそが

眼を離さでありき故れ終に女神の足は地に根ざしてすが
 たさへ向日葵におもがはりしつゝさればこそ向日葵の花幹
 の上にありてめぐる日影のまにまにうちつれだちて今も
 なほ目かれぬさだめとなりてこそはにやさしき女神の
 こゝろを表すなりけれ。

Sunflower は希臘語にて *Helianthus* 云々。

ぬひ衣

(ペネローペ)

- 1 Penelope
- 2 Icarus
- 3 Ithaca
- 4 Ulysses

ペネローペ¹はスパルタ王イカリウスの女なりきさてこれ
 に婚を求むる者多かりし中に、イタカ王ウリセス⁴、竟にその
 許を得たりき²。久之³ペネローペ夫に随ひて、遠くイタカに
 赴かむとす。イカリウスいたくこれを喜ばず、むしる彼と共
 にこゝに止まらむ事を欲せり。ウリセスはそをペネローペ
 の心に委せたりき。彼女はこれに答ふる所なく、その面衣を
 たのが顔におほひぬ。イカリウス、これを見て、いたく其

の心を憐み、ペテローペを送りて後、別れし處にモデスチー
即ち謙遜の爲めに、記念碑を建てたりき。
さる程に、鷲鷲の夢未だ暖ならず、わづかに一年にしてウリ
セスはトロイの戦に出でぬ。ウリセス出陣の後、時を經
る事久しけれども、つひに歸らず、消息杳として聞ゆる所な
く、生死また知るに由なし。こゝに於てか、ペテローペの
後夫たらむことを請ふもの數ふべからず、されど彼女は夫
の歸り來らむことを確信し、くさぐさの手段もて人々の請
を拒みつ、就中、その夫の父ラエ⁵ルテスの葬りの天蓋のため
に、禮服をつくるにかこつけて、えせ人の望みを拒みつるこ

そかしこかりけれ。そを如何といふに、若し禮服を造り
終へなば、人々の中一人の求めに従ふべしと約し置き、盡
のほぎ造りし仕事は、夜は之を解き去りて、いつ終へむとも
知られざりしなりき。されば、何時終へむとも知られざ
る仕事を、ペテローペの衣服といふは、これよりぞ初まりけ
る。ペテローペには、後の談あり、そは詳に次編なるウ
リセスの條下にもせむ。



SPHINX.

- 1 Lulus
- 2 Cithaeron
- 3 Polybus

解きえぬ謎

(スフィンクス)

神託、セイベス王¹ライウスに下りぬ、曰く、若し新しく生まるゝ子を養育せば、その王位にも生命にも危険あらむと。されば、彼はその子を獵夫に托して、その生命を絶つべしと命じぬ。さはいへ、愛らしき微笑、寶玉なせる嘘、獵夫は之を殺すに忍びざりき、故れ、彼は、その脚を束ね、樹枝に懸けて去りぬ。こゝに、チラーロン山²に羊かひあり、コリント王³ポリプスに仕へぬ、かれこの兒を、そが王の許に携へ行きけ

天馬

4 Merope
5 Oedipus
0 Delphi

天 馬

七十八

れば、ポリプス及びその妻メローベは、たのか子なきを幸に
養ひて、エチプスと名けぬ。こは足腫かしはの義なり。エチプス
コリントに在りて生長し、或る日、デルファイに詣でしに、神託
またこれに下りていふ、父を殺し母を娶るべしと。彼れ
大に驚き、むしろコリントを去り、その兩親に遠かることの
安きに如かずと思ひ決めつ、これポリプス、メローベを實の
兩親と信じゐたればなり。一日、ライウス一人の従者を
隨へ狭き路を辿りつゝ、デルファイに赴きしに、途に馬車に御
したる青年に會ひぬ、かくて路を避けよと告げしも、その命
を奉せざりしかば、従者進みて、その馬の一を殺しぬ。血

氣に逸る青年の、なごかはためらはむ、遂に怒りて、ライウス
とその従者を戮殺して、恨みに報しぬ、あゝ、彼れ青年エチプ
スは知らずして、そのまことの父を弑せしなりき。さて
もその後、暫しありて、セーベスの市は公道を荒らす怪物の
爲に苦しめられぬ、その名をスフィンクスと呼び、体軀獅子の
形にして、上部は婦人に似、岩上に踞して、道行く旅人を止め、
謎を興ふ、解くものは安全に通過し得らるれども、能はざる
ものは命を奪はる、旅人の彼が謎を解き得るもの、ふつにあ
らねば、また安らかに通りしものもあらず。エチプスは、
敢てその試に應じぬ、スフィンクス、彼に、

天 馬

七十九

4 Meroqe
5 Oedipus
6 Delphi

天馬

七十八

れば、ポリプス及びその妻メローベは、たのか子なきを幸に
養ひて、エチプスと名けぬ、こは足厘かじはの義なり。エチプス
コリントに在りて生長し、或る日、デルフイに詣でしに、神託
またこれに下りていふ、父を殺し母を娶るべしと。彼れ
大に驚き、むしろコリントを去り、その兩親に遠かることの
安きに如かずと思ひ決めつ、これポリプス、メローベを實の
兩親と信じぬたればなり。一日、ライウス、一人の従者を
隨へ狭き路を辿りつ、デルフイに赴きしに、途に馬車に御
したる青年に會ひぬ、かくて路を避けよと告げしも、その命
を奉せざりしかば、従者進みて、その馬の一を殺しぬ。血

氣に逸る青年の、なきかはためらはむ、遂に怒りて、ライウス
とこの従者を戮殺して、恨みに報しぬ、あゝ、彼れ青年エチプ
スは知らずして、そのまことの父を弑せしなりき。さて
もその後、暫しありて、セーベスの市は公道を荒らす怪物の
爲に苦しめられぬ、その名をスフィンクスと呼び、体軀獅子の
形にして、上部は婦人に似、岩上に踞して、道行く旅人を止め、
謎を興ふ、解くものは安全に通過し得らるれども、能はざる
ものは命を奪はる、旅人の彼が謎を解き得るもの、ふつにあ
らねば、また安らかに通りしものもあらず。エチプスは、
敢てその試に應じぬ、スフィンクス、彼に、

天馬

七十九

天 馬

八十

「朝は四脚、晝は二脚、夕は三脚にて歩む動物は何ぞ。」

と問ふ、彼は答へて、

「そは人なるべし、その稚きや手と足とにて匍匐ひ、

生長しては立ち、老いては杖を借る。」

と言ひぬ。謎は解かれぬ、スフィンクスは自ら岩上より

河に投じて死せぬ。民衆は、かれ等を危難より拯ひ出だ

し、感謝として、エチプスに王位を興へ、女王ヨカスタを配

しぬ。既にその親たるを知らずして、父を殺し、エチプ

スは、また母なるを知らずして母と婚せり。されど、この

秘密いかでか不知のまゝに終らむや。後ちセーベスは

飢饉に苦しめられ、流行病に襲はれぬ、この時、神託を請ひしが、エチプスのこと、端なくも願はになりぬ、さてヨカスタは自及し、エチプスは狂し、遂に眼を剝りて、セーベスを逃れ去りぬ。かくて、その臨終に至るまで、彼が不幸の生涯を慰めしは、只、彼の娘等のみなりきと言ひ傳ふ。

天 馬

八十一

まごはる蛇

(ラオコーン)

ラオコーンてふ名稱は、直ちに獨逸の文豪レツシングを想起せしむ、これ彼が成形的美術と詩歌との區別を論じ、キルギルが詩中のラオコーンに悲鳴の大音を發せしめしも、希臘逸品の彫刻ラオコーンが緩に呻吟の微聲を漏し、も、孰れもその當を失したるに非ず、これ全く詩と彫刻との範圍資材の相異に由來して、その相違こそ、なかなか詩人彫刻家ともにその手腕の凡非なる事を表すものなれと論じ、こ

- 1 Minerva
- 2 Palladium
- 3 Ulysses
- 4 Diomedes

れによりて希臘詩歌の真相を發揮したるに因るなるべし。
 トロイの市に有名なるミネルワの像にてパラテュームと
 名づけらるゝがおりき傳ふらく、これ天上より墜ち來りし
 ものにして、この像のあらむ限りは、トロイ市安泰なるべし。
 之のち希臘軍よりウリセス及びテオメデス僞つて市
 に入り、首尾よくパラテュームを竊み、希臘の軍營に運び去
 れり。

されどもトロイ市は猶ほ依然たり、希臘人は大に失望して、
 到底トロイを征伏する事能はざるべきかを疑ふに至れり、
 こゝに於てかウリセスの勸告に従ひ、詭計を以てトロイを

陥れん事を企てたり、かくて彼等は重圍を解き戰艦を引き、
 上げむと詐り、近傍の島蔭に潜みて時を窺へり。彼等は、
 又巨大なる木馬を造り、和睦の表章として、ミネルワに供物
 をなせり、その實木馬中には武具を裝うたる人を充てたる
 なり、かくの如くして後、残れる者共は皆その舟に乗じ、さな
 がら最後の訣別の如くして出帆せり。これを見たるト
 ロイ人は、欣然として永く閉されたる門を開き、希臘人が野
 營の跡には籠を離れし鳥の如きたも、ちの人々充ち滿ち
 たり。殊に巨大なる木馬は、彼等が好奇心を高め、その何
 の爲なるかを疑ひ、或人は分捕物として、市内に運び行くべ

しと唱へ、或人は却てそを目して恐ろしきものとなしき。
 テプテューヌの僧ラオコーン、喧争せる群衆にむかひ叫び
 て曰く、

「狂する勿れ市民、汝等は希臘人が奸策に富めるを
 知らざるの理あらむや、われは恐る希臘人が和睦
 の捧物また彼等の詭計に非ざるかを。」

と言葉終るや手にせる投槍を上げて木馬の横腹に投せし
 が、その反響はまさに是れ人の嗚咽に似たりき。若し此
 の時、一群の人ありて、一人の希臘囚虜を牽き來り、彼等の間
 に投せざりせば、恐くは彼等は不運の木馬と、その中なる人

々を殺したりけむを。希臘囚虜とは、その告ぐる所によ
 れば、名をシノンと呼び、ウリセスの害心により、希臘人が歸
 國の際、とり残されし者なりけり。さてこの者は恐怖と
 驚愕ともて、おつたづ首長の前に牽き出だされ、何にてもあ
 れ、訊問には明白に答ふべければ、生命のみは免されよと哀
 願して、竟にしか許されつ。かくて、木馬に關して彼のい
 へるやう、

「こは、ミネルフ神に和解の捧物として造られたる
 ものなり、その巨大なる所以は、市内に運び入れら
 るゝことを拒がんが爲めなり、所以者何、預言者カ

ルチャヌが若しトロイ人を取らば希臘人に打
勝つべしといふ預言の詞ありければなり。」

と。俘囚の言は、大にトロイ人の感情を和げ、その巨大な
る木馬を市内に導き入れむことを願ふに至れり、この時し
も海上より二つの大なる蛇あらはれ、陸上を目がけて匍匐
し來れり、群集ために右往左往に散亂する事蜘蛛の子を散
らすが如し、瞬時にして、蛇はラオコーンの立てる處に進み
行き、その二人の子を纏へり、悲痛の色、その容貌にあらはれ
たるを見て、ラオコーンの救助に赴かんとする時、毒蛇は却
て彼をまどひぬ、彼は身をもがきて争ひしかどいかに蛇身

のはなればこそ。またくこれ、ラオコーンが木馬を疑ひ
しを神の罰したまはむとてなり。民衆は凱歌の聲勇し
う彼の木馬を運び遂に其日は大なる祭禮もて暮れぬ、日は
没し果て、夜の暗すでに世を覆ふや、木馬の中なる武士ども
は、シノンに導かれて市門を開き、希臘人を引き入れぬ、市は
兵燹に炎々たる、宴會と熱酔とに酣なりし民衆は斬り殺さ
れぬ、かくてトロイは遂に滅びぬ。

- 1 Cadmus
- 2 Actaeon
- 3 Phœbus

獵の女神

(ディアナニアアクテオン)

時、正に午なり、太陽は出發、到着、兩標點の中央に在り、^カ
 ドムス王の子、²アクテオンは、彼と共に鹿狩に來れる青年達^カ
 に告げて曰く、

「友よ、われ等が網も、武器も總て獵物の血もて汚さ
 れぬ、われ等が獵物は一日のみに足れり、また明日こ
 そ新に獵らめ、今フ、³エプスが地を燥かす間におも
 ふがまゝに休らはむ。」

天馬

- 4 Dianna
- 5 Crocale
- 6 Nephelo
- 7 Hyale

松柏生ひ茂れる暗き谷あり、こゝは遊獵の女神チアナの聖⁴き住處なり、谷の片隅に洞あり、もとより人工の斧鑿を加へざれども、自然が成せる棲み所にて、石もて築ける穹窿^{カウロン}はいと細やかにいと巧みなり、かたへには滾々として岩清水湧き出で、その汀には小草繁りあへり、森の女神は、獵の疲れを休めむとて、この泉に肌を洗ふこと屢々なりとなむ。

或る日、チアナは冊づきの女神等と、その泉の傍に赴き、一人には投槍、箠、弓矢を渡し、他の一人には衣服を托しぬ、他の一人はそが足より鞋を取り去りぬ、彼等女神の中には最も熟練なりといふクロカレ⁵は彼女の髪を整へ、チフェレ⁶、ヒアレ⁷

その他の神には小瓶して水を運びぬ。チアナ女神の化粧に忙はしき間に、如何なる運命が導きけむ、アクテオンは獨り友に離れ、いづこともなく逍遙ひありきて、泉の邊に來りぬ。かくて彼の洞近く來るや、女神たちは驚きあわて、己が身もて女神チアナを覆ひまゐらせつ、されどチアナは他の女神たちよりも丈高くましませば、御頭のみはかくるゝ事なかりき。驚愕と恐怖と羞恥とのためにやあらむ、チアナの容貌は、たそがれ、曉の雲の彩りにも似通ひて、かく侍女たる神たちに取り圍まれながらも、なほ彼女の矢を求めしかど、如何ともする事能はざりければ、水を取りて

無禮者の顔に注ぎて云ふやう、

「若し能ふべくば、去つて類稀なるデアナを見つこ

語れ。」

と、水注がれたるアクテオンは驚くべし、その額には枝ある
鹿の角を生じ、首は長う、耳は尖り、手は脚に變じ、腕は長き脛
に變じ、体には鹿の子斑の毛を生ひぬる。さしも大膽な
りしアクテオンも、今はいたく怖れ戰きて其處を逃れぬ、足
の早きよ、たのれ自らもいと怪しうて、傍の水に水鏡うせば、
こはいかに。「あな、あはれ。」と言はむとせしを、言葉はな
くて奇しき叫聲のみ聞ゆつ。さはいへ、心はまだありし

- 12 Theron
- 13 Napo
- 14 Tigris
- 8 Melampus
- 9 Pamphagus
- 10 Dorceus
- 11 Lelaps

ながらの人なりしかば、今は如何にせむ、おのが宮殿に歸ら
むは、そも耻多し、寧ろ森に隠れむか、しかせむも怖れあり、と
おのが迷ひの八衢ヤチマチにためらふは、どこぞあれ、犬に姿を見出
でられつ、スバルタ10犬8ラムブス11吠聲高う12信腕13をなせり、
ムファグス10ドルセウス11レラプス12テロン13ナベチグリス14およ
び其他の犬とも、疾風はやての如く追ひ襲ひ來、断岩を超え、絶
壁を跳り、想ひも及ばぬさかしき崖路がけぢを、逃る、後には彼等
も續けり、かつては、彼が鹿を逐はせて喜びたる犬の群
も、今は却て仇とぞなりし、追ひつめられて、彼は、

「われはアクテオンなり、汝等の主を忘れつや。」

と叫ばんとすれど言葉は出でず怪しき聲のみ木魂に響く、
 あはやと言ふ間に、一犬は遂に迫りて彼の肩に跳び付きぬ、
 他の一犬はその背を噛みぬ、つきつき追ひ來し犬の數々、片
 時の間に集りて、齊しく彼等の齒をば肉の中に埋めつ、
 痛手に苦しむ彼は絶叫せり、その音聲は全く人聲と異なり、
 されど又鹿のなく音にも同じからず、彼の友人は犬を勵ま
 し、アクテオンを呼びて、この面白き獵に加はらしめむとせ
 り、おのが名を呼ぶ友人と共に楽しく獵して、犬の功績を賞
 づべかりし彼も今は及ばず、チアナの激怒に觸れたる身は、
 終にその友人のために、肉を寸断せられをはんぬ。

- 5 Aetna
- 1 Aesculapius
- 2 Pluto
- 3 Jupiter
- 4 Cyclops

清きふきけ

(アドメツスとアルセスと)

アポロの子、エスクラピウスは、そが父に金匱の秘方を受け
 て、回生の妙術を得たり。されば、² プルトは、いたくおち怖
 れて、³ ユピテルを誘ひ、エーヌカラピイユスに電光を放たし
 め、遂に彼を倒さしめぬ。アポロ赫然として怒り、電光を
 造れる、罪なきシクロペスに、仇を報せんとしつ。彼等が
 製作場は、⁵ エトナ山に在りて、その窟より吐き出だす烟火常
 に絶えず。アポロはシクロペスの徒に彼の矢を放ちぬ、

6 Admetus
7 Amphrysus
8 Pelius
9 Alcestis

天 馬

九十八

こを見たるユピテル、また激怒を催し、一年の間、アポロを人間の
下僕となしぬ。かくて、アポロはテサリアの王アド
メツスに仕へ、アムブリス河邊の牧場に至りて、彼の羊を
牧しぬ。ペリアスの娘アルセス⁸は稀世の美人なり
き、されば、婚をこれに求めし者多きが中に、アドメツスもそ
の一人なりき。ペリアスは、獅子及び野猪の牽ける兵車
に乗りて來らむものぞそが婿たるべきと約しつ。アド
メツスはアポロの助を得て、遂にアルセスをわがもの
となしぬ、されどその喜びもまたく束の間の夢なりき。
やゝありて、彼は病魔に犯されて、不幸の病床に臥し、終に死

に瀕しければ、アポロは彼れか賤死者を立つべしとの約を
もて、彼れの死の免さるべう、運命の神にぞ乞ひける。アド
メツスは、朝臣、従者の諛を信じ、おのが身がはりを見出さ
む事のいと容易かるべきを想ひぬ。あゝ、こは至難の業
なりき、君のためには一死を輕んじて、戰場に馳する勇士も、
病の床に彼れが命に代らむは屑とせざる所なりき。諛
ふ者、豈こを敢てせむや、黄金と幸福とある所にこそ忠實な
る従者はあれ、患難と死苦と、彼等また共に語るべからず、あ
ゝ、死生を共にし、身を犠牲とせむもの、眞實の友ならずば、こ
れ相愛の女性なり、アルセスは、身を以てその任に當ら

天 馬

九十九

天馬

ひと誓ひぬ。 アドメツス、かゝる獻身を許さむやいか
 まこと、彼は彼女のために生をねがひぬ、彼女なくば命あり
 とも何にかはせむ、されど時おくれたり、彼が病の快癒に赴
 くにづれて、アルセステスは起たすなりぬ。 この時、ヘル
 クレス、アドメツスの宮殿に着し、瀕死の佳人のいたましき
 を見、世にもあはれの物語を聞き、勇を鼓して病室に入り、彼
 の女を携へて去らむとすなる死の神を捉へて、彼の女を許
 さむことを強ひぬ。 去る程にアルセステスはまたく癒
 えて、その餘生をいとも楽しく、夫と共にあぐり得たりきと
 ぞ。

百

戀路の火影

(ヘロとレアンデルと)

レアンデルはアビドスのわかものなりき、アビドスは、亞細
 亞と歐羅巴とを隔つる海峡の亞細亞の岸なる一都會なり。
 欧州の海岸セストスの都會にウエヌスの仕ふるをこめへ
 住めり、レアンデルはヘロを愛して、彼女が塔上よりかゝ
 ぐる火把に導かれて、夜ごと夜ごと海峡を泳ぎ渡りて、遇ふ
 をこよなき樂としつ、されど一夜風すさまじう海あれて、力
 盡き果てわたつみの水層となりはてぬ、浪心なう彼がむく

天馬

百一

ろを歐羅巴の海岸にうちよせ来りしかば、へろこゝに初め
て彼が死を知り、なげきに沈みてつひに塔より身を投げて、
自もまた海中に葬られぬ。

冕皇

(アリアドネ)

ミノイ¹の女、アリアドネ²は、テソイス³が迷宮より脱れ出づ
るを助け、後彼によりてナクソスの島にぞ導かれける。
されどテソイスは素より彼女を愛したるにあらねば、アリ
アドネの眠れる隙をうかひ、獨り帆をあげてこの島を去
りぬ。アリアドネ覺むれば、身はおそろしき荒磯島に取
り残されて、ありつる人の影もあらず、沖の浪間にほの見ゆ
るは、まさしくテソイスの輕舸なるべし。さてアリアドネは、

1 Minoi
2 Theseus
3 Naxos

4 Bacchus
5 Tyrrhenian

天馬

百四

今更に痛恨悲歎やるせなき涙に沈みぬしが、ウエヌス彼女を見て、とらゝに憐愍の心を起し、「死すべき人」のそれに代へて、「死なざる神の戀人」を興へむと約したまひぬ。をりしもあれ、⁴バックヌ強ひて⁵チレニアンの船人どもに望みて、このナクソス島に來り、アリアドネが不幸の運命をはかなみて泣き伏したるを見、彼女を慰めて、遂にミチルワがテソイスに預言したらむごとく、彼女を娶りて妻とせり。その結婚の贈物として寶石もて飾れる黄金の冕を彼女に興へしが、彼女の死後、彼はその冕を取りて空中に投げ上げしに、その寶石次第に輝き終に御そらの星とはなりぬ。故れ、その

0 Hercules

天馬

百五

形、今もなほ、冕の姿なしてうづくまれるヘルクレスと蛇をもてる人との間にありてぞ輝ける。

5 Halcyone
6 Ionia
7 Claros

1 Thessaly
2 Cayx
3 Hesperus
4 Aeolus

翡翠鳥カハセ

(サイクスとハルシヨオ子と)

テサリにサイクスと呼べる王ありき、御代静謐にして、かつ
て、衆民怨憤の聲を聴かず、彼は明星ヘスベルスの子にして、
瀟洒たる風手、そらろに其の父を憶ひ出さしむるものあり。
エオルスの女、ハルシヨオ子は彼の妻にして、まごゝるをも
て彼を愛せり、彼はその弟を失ひ深き愛に沈みしが、その後
國に屢々怖るべき怪事續出し、神々の彼をなやますかと疑
ふばかりなりき、こゝに於てかサイクスはイオニアのクラ

ロスに渡り、アポロの神託を受けむと思ひ決め意をハルシヨオ子に告げければ、彼女は驚き、その面の色を失ひていふやう、

『あが夫の君われに如何なる罪あればか、かくはわれを振り棄て、遠く去らむとはしたまふぞ、われなくば徒然を感じたまひしその愛情は今何處にか失せつる、われハルシヨオ子もなければ心安からず思ひなり給ひつるにか、さてはむしろわれを棄てむとし給ふにか』

と心のたけを掻き口説きつ、又彼女の父エーオルスは風の

神なるからに、父と共に在りしころ聞き習ひて記憶に留まる暴風の事などをさへ説き明して、一向夫の意を翻さしめむとせり、

『行きかふ風の衝突のために、ほのはおそるばかりの暴風も吹くぞかし、かゝる中をも行き給はむとならば、われをも共に連れ行かせたまへ、愛する夫の君、いかでわれをも具せさせたまへ、さらずば御身が遇ひ給ふべき眞の災のためのみならず、怖れのためにもわれは苦しめられなむを』

と言葉をつくして、門出を止む。

サイクス王はこれ聞きて、痛心措く能はず、一度は彼女を
携へむかとも思ひよりしかど、海上の危険に遇はせむこと
のなほさらに忍び難かりしかば、聲を和げて慰むるやう、

『われはわが父明星の光によりて誓はむ、若しわが
運命にして許すべくば、日がその軌道を再び廻ら

ざる前に歸り來るべし。』

とどかく語らひすかし、聞えて出發の準備をいそがせたり、
ハルシヨオチは舟楫のそなはるを見て、災害の前兆を知り
たらむが如くにをのゝきおそれ、蒼白の面に、熱涙珠をなし
て生別を告げたりき。

なさけを知らぬ船子どもは、いかで彼等の愛の濃かなるを
知らむや、健腕軽く槳を蕩し浪を蹴立て、舟を進む、岸上の
ハルシヨオチ涙に曇る眼をあげつ、浪間を見れば、手を動
かして遙に惜別の情を示すは、夫の君なり、此方もかはらぬ
思の丈の届けよかしと手を揮り示す程に、人の姿も舟の影
も模糊漂渺の波に消えて見えなくなる迄佇みしが、かたみこ
残りし群鴨さへかくれ果てぬ、さてしもやはの名残をしさ
を振り捨て、わが家にかへり、室に退き急ぎて床に身を投
げたり。

さて彼の港を出でたる、一艘の輕舸は軟風に帆を孕せ、小波

の上を滑り行ば楫取水夫ども聲高らかに舷叩きて歌う歎
 乃既に航路の半になりし折しもあれ夕空俄に墨の如く吹
 く東風いきほひすさまじう澎湃たる怒濤天を衝かむとす
 るに至りぬ船長は帆をおろさむとを命せりされど鞆鞆と
 してさかまく浪の響吹きしきる嵐の音は彼が命令を水夫
 に傳へず猛り狂ふ逆浪人の叫喚と和し船をつく風搥聲と
 應じ稻妻さへひらめき来りぬあゝステギアの暗黒實に恐
 るべし。

舟は風につれ浪に従つて浮べり恰も猛獸が獵夫の槍に刺
 されて苦しむらむ如く。漣つ瀬なして降る雨のあし木

空はさながら海と一つに合はむが爲めに墜ち来るかと疑
 はれ稻妻の光止む瞬間は惨憺たる暗黒天地を覆ひ一尖の
 電光、盪蕩せる蒼海を寫し出す時はいかに猛き水夫もなほ
 魂を奪はれざらむ彼等は家に残せる兩親親族妻子をおも
 ひサイクスはハルシヨオチを憶ふ見る間に櫓は折れ舵は
 碎け船もまた電光に震ふかくて船は破れぬサイクスは船
 の碎片をつかみて父を呼べども明星雲にかくれて亦光ら
 ず再び山なす浪は来りぬサイクスは遂にハルシヨオチが
 名を口にしつつも海底ふかく沈み去りぬ。

ハルシヨオチは是等不幸のありしを知らず夫が歸り來む

- 9 Juno
- 10 Iris
- 11 Somnus
- 12 Cimmerian

日を待ちに待ち、數へに數へ、歸り來む日に着すべき衣服を準備し、香を燒きて神に祈り、殊にユーノに祈誓を籠め、

「夫を安全に守護せさへ給へ、早う夫を歸らせて給へ、歸り來らば昔にも増して妾を愛せさせ給へ。」

女神は彼女に憫を催うし、イリスを呼びてのたまはく、

「忠實なる使者イリスよ、いとぎソムヌスの睡眠國

に至り、彼に命じてサイクス10の姿してハルシヨオ

テの處に赴き、つぶさに事情を告げしめよ。」

と、イリスは種々の色もて彩れる衣服を着し、虹の掛橋

御空に飾りつゝ、急ぎ睡眠の王宮12さして行きぬ、チノリア國

- 13 Phaebus
- 14 Aurora
- 15 Lethe

のかたへなる洞穴は、おどましき神ソムヌスの住所なり、こゝは、¹³フェブスも敢て來らず、彼日輪(フェブス)の上るとなれば沈む事もなう、素より晝もあらざる處なりけり。雲と蔭とは地より高まり、只微光の暗鬱たるのみ。冠毛ある曙の鳥、かつてアウロラを呼びしことなく、番犬吠えず、鋭敏なる鷲鳥の沈靜を破るなし。野獸徇14祥はす、家畜戯れず、樹枝風に戦かず、人聲寂寞を妨げず、寂滅の氣を支配し、岩窟の底より¹⁵レーテ河流れ、そのゆるやかなる私語漫に睡を催さしむ。罌粟は洞穴の門外に茂り、その他の雜草近傍を點綴して花咲けり。これ等よりその汁を取り、暗

黒の世界に撒布して睡眠を集むるなり。門はあれども開くべき扉なく番人なし、唯そが中に黒羽黒帳をもて飾れる鳥木の臥床ありて、神はその上に手足を舒べて熟眠せり、彼の傍には夢のともがら種々の姿して横れり。女神は洞穴に入りて、その周圍なる夢をかき拂ひければ、彼女の光輝暗黒なる岩窟の竅穴を照せり、ソムヌスは辛うじて眼を開き、胸に垂れかゝれる髻かきはらひ、その腕によりてイリスに向ひ、その使命を尋ねたり、彼女答へけらく、

『神たちの中にも、最も温良にして心の平和を與へ、なやみに憊れたる人々を慰むるソムヌスよ、ユー

16 Trachinao
17 Morpheus
18 Icelon

ノは御身を遣してトラヒネー市のハルシヨオチに夢送らしめむとす、彼處にて彼女の夫を現し、危難の出来事ども残る限なく語らしめよ。』

と、使命を告げたるイリスは、長くこの沈鬱の氣に堪ふる能はず、自らもまた微睡に誘れむとするを感じて、急ぎ逃れて洞穴を出で、前に來りし虹の掛橋うち傳ひて、おのが住處にぞ歸りける。

ソムヌスには多くの子ありき、その中にありても、人の假裝をよくし、散歩をまね、容貌、言語、衣服、風采の特色に擬すると、さに得意なるはモルフオイス¹⁷なり、イセロス¹⁸は、鳥獸及び蛇

等にまね、フアンタソスは、岩、水、森などの無生物に變ず、これ等は皆王や、その他あて人の睡眠時に仕へ、他のものは常人の間にを働さける。ソムヌスは茲に於てか、イリスの使をその子モルフオイスに傳へて、自らは安らげき眠りに就きぬ。

モルフオイスは羽音を立てず、²⁰ヘモニア市に飛び行き、彼處にて翼を休め、確にサイクスシキスの姿を見極め、そを學びて憐むべき妻の床上にぞ翔り行きける。さて彼は、死者の如き蒼白の容顔にて、裸体のまゝ、床頭に立ち、その髯よりは水を滴らせ、眼には涙を漲らせて、ハルシヨオネの枕にかたむき

曰ひけるは、

「¹⁹幸なき妻よ、御身はサイクスを認め給ふかにかに、われはこの現世の人ならねば、さまたう變れるを、さはいへわれこそ御身が夫よ、ハルシヨオネよ、御身の心をこめたる祈請も叶はざりしぞ、われは死せり、されば御身の許に歸る時にあらじ、エーヂアの海にふきすさぶ夜嵐によりてわが船は沈みぬ、御身の名を呼びしほどにわが口は水に満たされぬ、そよこの風の便りにも御身はわが死を聞かざりけむ、われは自らわが運命を告げ聞えむとて

來りしなり、あゝ、嗟け、泣けよ、悲めよ、愛へよ、涙なく

してわれをな²¹タルタルスに降らしめよ。」

と、恰もサイクスサイクスの聲音もて語りぬ。泣き叫びなげ歎なげび悲む

ハルシヨオチは眠りながらにその腕を伸べ、夫の体を抱か

むとせしが、握みしは空なりき。

『止れわが夫、何處にか往き給ふ、われをも共に連れ

行きてよ。』

と、叫べは、おのが聲に驚かされて、さむれば夢の愕然として、

周囲を眺むれどもありし人の姿は見えず、こゝに於てか彼

は胸をうち衣を裂けり、彼女の聲に驚かされて走り來るはじたり婢

欠

MISSING

する習ならば御身に代りて死なむものを、されど
そは難し、御身は吾が記憶と吾が歌との中にこそ
活きめ、わが琴は御身を奏つべし、わが歌は御身の
運命を語るべし、御身はわが悲痛の記念たる花と
なるべし。』

と、語れるをりしもあれ、地に漉げる血は草を染めて、チリア
ンの染色より、尙美しき花おひ出でぬ、花は早百合のそれの
やうに、但、こは白色なれど、彼は紫なるのみをけぢめに、
フェブスは、これにも足らで、その花瓣に愁嘆かなしみの記號、ニ
ニを印しぬ、されば今も春くる毎に花咲き匂ひて、彼が運



JASON.

天馬

百三十

命をぞ告ぐるなる。

因にいふとくに記す風信子(Hyacinth)は今いふ所の風
信子にはあらじおそろくは藤尾(His)かヒュニ草(Lar-
ispurk)か、或は三色堇(Pansy)の一種なるべくや。

一説には⁴チュンネルス(西風)亦ヒヤシンツスを愛で、アポロ
の彼を寵するを嫉み、その投環を吹き彼を打たしめきとも
いふ、いづれか誠なるべき。

- 1 Athamas
- 2 Nephele
- 3 Mercury

金色の羊皮

(ヤーヅンゴメデアと)

遠きいにしへテサリ¹國にアタマスと呼ぶ國王、ネフェレ
 と稱する女王ありて、その間に一男一女ありき。然るに、
 王は女王に飽き離縁の上、他の女王を迎へぬ。ネフェレ²
 は繼母のために危険の及ばむことを恐れ、遠き處にその子
 女を離れしめむとせしが、メルキユリー³はこの舉を助け、遺
 るに黄金の毛ある牝羊を以てしぬ。母は、この牝羊こそ
 彼等を安全の位置に運び去るべきを信じて、二人の子をし

- 8 Aetes
- 9 Jupiter
- 4 Helle
- 5 Dardanelles
- 6 Hellespont
- 7 Phryxus

てその背の上に跨らしむれば、牝羊は空中たかう驅け上り、東の方へ打向ひて、歐羅巴と亞細亞との境なる海峡に馳せ行きしをりしも、其娘へレ⁴背の上より落ちて海中に溺れぬ。今の⁵のダ⁵ルダ⁵ーチ⁵ル海峡は、むかしへ⁶レスポ⁶ントといひぬ、これ彼にに由りて名づけられたるものなりとぞ。かくて牝羊はなほ、東、黒海の東岸コルチスの國に達するまでは、その馳驅を止むる事なかりき。さて其處にて、小兒フイリクス⁸は、國王エーテス⁸よりこよなき待遇を蒙りぬ、故れブリクスはユピテルに犠牲として牝羊を供へ、その金毛の羊をばエーテス王に、獻じぬ、エーテスは之を神聖なる森林の中

- 10 Aeson
- 11 Jason
- 12 Pelias

に置き、睡らざる龍をしてうち護らしめぬ。

テサリーに他の王國ありて、アタマス王の國に隣り、その親族のものこれが王たり、王名をエーゾン¹⁰と申す、エーゾン老いて國政に倦み、その子ヤーン¹¹人とならむ時、速に位を讓るべく約を定めて、弟ペリアス¹²に王冠を授けぬ。

後、ヤーン長するに及び、叔父ペリアスに位を禪らむことを求む、ペリアス心竊に篡奪の志あり、されを偽りて曰く、

「われ喜んで王位をゆづらむ、然れども御身まこと主位を望まば、先づコルチスに至り、曾て彼等に傳はれりといふ金毛の羊を取り返し來るべし」

- 19 Argo
- 14 Hercules
- 15 Theseus
- 10 Orpheus

17 Nestor

天 馬

百三十四

と、ヤーゾン快諾、直に遠征の準備をなす、當時の航海はみな木の幹を刳きて造れる獨木舟を用ゐ、僅に數人を容るゝに過ぎざりければ、五十人を載すべき巨大の船舶は、人々の之を怪みたるも、固よりとわりなりといふべし。船つひに成りぬ、名づくるに匠工アルグスの名を以てし、アルゴと命じぬ。こゝに於てか、ヤーゾンは冒險の少年を集め、おのれその首領として、テサリーの海岸を離れぬ。その中には、有名なる半神半人として、希臘鬼神傳中にあらはれたるもの亦尠からず。ヘルクレス、テソニス、オルフォイス、キストルの如き實にこれに屬す。

- 18 Phineus
- 10 Symplegades
- 20 Cadmus

さてヤーゾンの一行は、船をレムノス島に寄せ、ミシヤを経てトレースに向ひ、¹⁸斐フィノイスに會して、未來に關する教を受け、險難の聞え高き、黒海の入口なるシムブレガデス¹⁰即ち衝突島と稱する二大暗礁の間を、鶴に導かれて、やすらかに通過し、東海岸に沿うて航する事數日、遂にコルチスの國に着しぬ。是に於てか、ヤーゾン使を國王エータスに遣し、告ぐるにその使命を以てす。エータス答へて曰く、

『若し御身にして、黃銅の足、火焰を呼吸する牝牛に鋤を軛し、そをしてカドムス²⁰が殺戮せる龍の齒を

天 馬

百三十五

21 Medco
22 Hecate
23 Mare

天馬

百三十六

植ゑしめば、喜んで御身の賄を諾せむ。」

蓋し龍の齒を植ゑば、それより生ずる者は、武器を具へたる勇士にして、こを植ゑたる者に武器を以て向ふべしといふ。ヤーンズンは、快う之をうべなひつ。之より先、彼は

國王の姫君メデア²¹に遇ひ、共に宣誓の神ヘカテ²²の祭壇の前に結婚を誓ひたり。メデアはいみじき幻術者なりければ、ヤーンズンは彼女の助により、火焰を吐く二頭の牡牛と、勇

士等の武器とに、容易く抗するを得たるなりき。時は來りぬ、マルス²³の森は、國王を初として、各地よりの群集蝟の如く、丘上丘下人をもて充たされたり。やゝありて、黄銅の足

したる牡牛進み來りぬ、森よりは炎々たるほのほを吐き、經る所の雜艸盡く爲に焼かれぬ。その燦煙、恰も生石灰の上²³に水を注ぎたらむが如し。此方よりは、ヤーンズン、彼等に會せむとて、徐々として出て來れり、火焰の呼吸はものともせず、制止の聲を厲まして、彼等が怒を静め、泰然としてその頸を輕打しつゝ、手早く梃をつけて、強ひて鋤を牽かしめたり、傍觀せる群集は、大に愕き、彼が爲めに心痛せる希臘の勇士どもは、歡喜の大聲をあげたりき。應てヤーンズンは龍の齒を取りて地に播けり、とみる程に、おやしきかもよ、あらがねの地の上より、武器を裝うたる勇士

天馬

百三十七

敵知れず現はれ出でぬ、かくて現はれ出づるや否や、刃を揮つてヤーゾンに向へり、希臘人は其の光景を見て震慄せり、彼の除災の法を授けたるメデアすら恐怖のために顔色を變ずるばかりなりき。ヤーゾン暫しは劍と楯とを以て抵抗を試みしが、彼等の攻撃激烈にして、危く見ゆる折しもあれ、メデアが教へたる妖術もて彼等を集め、石を拾ひて彼等の中に投じぬ。こゝに於てか、彼等は互に刃を交へ、相打ち相戦ひ、地より生じたる勇士一人として生を保たざりき。希臘人は馳せ寄りてヤーゾンを抱きぬ。エーテスは翌日を期して、黄金の羊毛を與へむ事を約しぬ。

希臘人はヤーゾンを繞り圍みて、歡喜にみちみちアルゴの船邊に退きぬ。されど夜に入りて、メデア、ヤーゾンを訪ひ來て曰く、

『明日を待ち給ふべからず、父エテスはつとめてア
ルゴスを攻撃すべし』¹²⁴

と。されば彼等は、メデアに尾してマルスの森に行けり、か彼處には怖るべき龍ありて、かの羊毛を護れり、其眼光赫灼としてヤーゾンを射、あたりを拂うて見えたりしが、メデアは豫て備へ置きつる薬水を注ぎ、幻術を施し秘密の歌を歌ひたり、その香龍の怒を静め、暫くありて、かつて眠る事なき



POMONA.

天・馬

百四十

眼を閉ぢ、ヤーンの方へ向ひ熟睡せり。ヤーンは黄金の羊毛を探り、メデア及びその友と共に、舟に乗じて夜にまぎれ、コルチスを去り、テサリーに歸りて、かの羊毛をベリアスに、アルゴをネプチューンの脚にぞたてまつりける。

1 Hamadradis
2 Pomona

葡萄^{ブドウ}かつら

(ポモナニフエルツムヌスゴ)

1 ハマドリアツドは森の水神^{ニムフ}なり、そが中にもポモ²ーナてふ
は、こよなく園をめで、菓實^{こゝろみ}を養育^{おほほ}す事をのみ好みて、森と河
とは絶えて護らず、唯只耕作すべき土地と、美^{うつく}き林檎の樹と
を愛しぬ。ポモナの右手^{みぎて}に持てる武器は、投槍^なにはあら
で樹刀なり、曾てこをもて繁れる杖を拂ひ、歪めるを正しう
したる事もありき、又、實^みりよからぬ樹に接樹^{つぎ}したる事もあ
りき。又、おのが愛樹には、枯れむとするに、灌^{かん}ぎ、朽ちむと

7 Verlumnus 3 Fauns
 4 Satyrs
 5 Sylfauns
 6 Pan

天 馬

百四十二

するをば防ぎぬ。又彼女は田夫野人の侵入を恐れて、その菓園を鎖し、かつて人の入り来るを許さず。この女神、美しければ、戀ひ慕う神々も亦多かり、⁷フアウンスとサチルス等とは、その愛を得むためには、彼等が持てる總ての物をも興へむとす。老いたるシルファエスは、た然らむ、頭の周⁸邊に松葉の冠したるパン神もまたこれに劣らざるべし。されど、中にも殊に勝れて女神を愛せしは、⁷フェルツムヌスなりき。されど彼をさへ女神はいみじう厭ひぬ。彼が賤の男の姿に打⁹扮ち刈り得たる女神の穀物を籠に容れて、その許に運び、女神を執視せしこと、あはれいくそ度なり。

りけむ。彼の周圍に束ねたる藁を見ては、誰かは彼を野人ならずとせむ。彼が手にする籠を見ては、誰かは、今し、疲れし牛の腕¹⁰解きし程と思はざらむ。或は木鉄もちて、葡萄園の園丁の如く装ひ、或は梯子を肩にして、林檎の畑にゆき、ある時は餘隊の兵士のやうに道をそゝろありき。ある時は漁夫の如く竿を携へ、かく様々に姿をかへて、女神に近づき、せめてはかなき心やりとはしつ。ある日、フェルツムヌスは、老婦人の装して來りぬ。りの白髪は頭巾もて覆ひ、その手には杖を携へたり。さて女神の園に入りて、菓實を賞でたふふる事大方ならず。

天 馬

百四十三

8 Helen
9 Penelope
10 Ulysses

相寄り相挽け、相からみ相全うするを見て、なごか
その身のうへに及ばざるを、實にわれは御身の配
偶あらむ事をこそ望め、ヘレンは既に多くの戀人
に慕はれず、ヘチローへはた敏捷なるウリセスの¹⁰
妻たらずや、御身が彼等を拒む故に、彼等野の神々、
山の神々は、却て御身を慕ひ、御身の後を追ふに非
ずや、御身能くわが勸告に従は、總ての求婚者を
辭み、獨りかのフェルンムヌをうけよ、われはよ
く彼を知るものなり、彼は彷徨の神にあらす、まこ
とにこの山に屬する也、彼は道行き振り、人に戀

天馬

百四十五

天馬

百四十四

『はしき者よ、かくてこそ御身の信用は益すべけれ。』
と、老婦人にも似ざる熱心もて、ポモーナに接吻けぬ。さ
てその側に腰打ち懸け、累々として頭上に垂れかゝれる菓
實を見入れたり。その向ひには、張り裂けむばかりに熟
せる葡萄の蔓もて纏はれたる榆樹あり、彼はその樹と、それ
に寄る葡萄とを指し、讚めて曰く、

『この樹、若し孤立して、この寄り懸る葡萄蔓なくば、
いかでかわれ等の心を牽かむ、たゞ是れ無用の葉
ならんのみ、葡萄また若し榆樹に纏ふ事能はずば、
只地に匍匐して止まむのみ、御身、その樹と蔓との

ふるが如きさる情薄き神にはあらず、兄御身一人をのみを戀ひ慕へる、しかのみならず、彼は齡正に青春にして艶に、就中假裝に妙を得たり、御身が好む所は、彼何にてもあれ、之を爲すを得べし、豈これに止まらむや、彼は御身が好めるものを好み、花園を喜び、林檎を賞つ、さはれ、今は、菓實も、美花も、はた何物も、彼が空想を樂しましむる事能はず、念々に只御身をしぬべり。神は殘忍を罰し、ウエヌスは剛悍の心を惡み給ふ、されば、神々はいつしかかゝる業に悔あらしめ給はむ事を記せよ。さら

11 Cyprus
12 Iphis
14 Teucer
13 Anaxareto

ば、その一例として、キブルスによく知られたる事を物語らむ、かくて御身を慈仁深きものたらしめむかな。¹² 賤が家の子にイフィスといふがありき、彼、トイチ¹³エルの舊家の貴婦人アナクサレテを見て、戀慕の情を起し、及びなき身と思ひ知りつゝ、幾度かその情を制せむとしき。されど、戀の鞭にむちうたれたる意馬、遂に止め難う、その家に至りて哀を求め、始めはその乳母にすがりて切なる心を告げぬ、かくて家人の心を收攬せむと思ひければなり。

時としては、小さき文机の上に彼の願をしるし、時として、彼の涙して濕へる花環をその戸口にかけぬ。またある時は、室に近きてその哀情を訴へ、つれなき板戸を恨むる事もありき、さはれ、霜月に荒るてふ大浪に向ふらむ如く、とよとただに答はあらず、獨乙の鍛冶が打ち鍛ふる鋼鉄なす堅き心は、なかなか、彼を嘲り、彼を笑ひ、希望の微光をだに與ふる事なかりき。

イフイスは、今や希望なら戀の苦みに堪ふる能はず、戀人の戸前に立ち、——アナクサレヲよ、御身は

われに勝てり、最早わが煩しき願を忍ぶの要なかるべし、御身いざ勝てるを喜べ、喜の歌を歌ひ、桂の冠もて御身の額を飾るべし、御身勝ちて、わが身は死すべし、石の如く冷なる心よ、喜べ、今は少くとも御身が喜ばむ時は来りぬ、こをもてわれを賞め給はむや、とは知らず、されど、御身を愛するが爲に、わが生命を捧げたる事は證せられむ、われ来りて御身が前に死なむ、御身之を見て、自ら心を樂ましむべし、さはれ、神々よ、人の悲運を見下し給ふらむ神よ、来りてわが運命を見よ、なはせ、管願はくは、来ら

ひ年にわれを記憶せしめよ、その歳々をしてわが
名譽に歸せしめよ。——かく言ひ終りて、青白き顔
と涙に濡うたる眼とをアナクサレテの家に向け、
門の柱に繩を結び、その上に花束を懸け、くびれむ
として再び獨言つらく——この花束ぞ御身を喜
むしめむ、あはれ、つれなき處女よ。——かく獨言ち
て、遂に縊れ死せぬ、さて彼が縊れし時、門をうちし
が、その響きながら呻吟の聲に似たりき。 奴僕
ども是の聲をき、門を開けば、彼の屍かゝりて在
り、故れ驚きてけたたましき叫をなし、家に運びて、

家刀イニヒ自に渡しぬ、さるは、アナクサレテの父は已に
この世を去り、母のみ家に残りゐたればなりけり。
母は彼の屍を抱き、いと惨憺の思を爲し、が、かく
てあるべき事ならねば、青白き屍体、痛ましき葬式
の町を経て、その墓に運び行かれぬ。 さてこの
列のアナクサレテの前を通過するや、悲愁かなしみの聲、彼
女の耳に達しぬ、この時、既に、復仇の神、彼女に神罰
を蒙らしめむとし給ひぬ。

——痛ましき葬式の列を見ればや——と云ひつつ、
井樓に上り、開ける窓より彼の葬式を望むに、棺車

に横はれるイフイスの姿、彼の眼に映すると俾しく、その身堅うなりて、温き血は冷えたり、歩を後方に移さむとすれど、その脚も動かばこそ、願みひとすれど、その面もめぐらばこそ、四肢は漸く變りゆきて、その心の如く、全く石質となりをはむぬ。御身疑ひますな、これ事實なり、今もなほ、サラミスのウエヌスの宮居に、その像はむかしながらにぞ残れる。

はしきボモーナよ、よくこれ等の事を思ひ、嘲罵と怠慢を避け、疾く御身の戀人を受けよ、さらば秋

の霜御身の若き實を凋ませ、暴き風御身の花を散らす事なかるべし。」

かく語終りて、老婦人はその假裝を落しぬ。とみれば、彼女の前には、只端正なる青年フェルツムヌスの立てるを見るのみ、まこと、この青年の姿は、彼女の眼に、雲より出でし太陽の如くに見えぬ。彼は再びその願を繰り返すの要なく、いと温き手に迎へられて、これより後は、諸共に渝らぬ愛情を楽しみきとなむ。

- 1. Bacchus
- 2. Silenus
- 3. Midas

釅シふく風

(ミダス)

或る日、バックス¹、ミダスが往時の師、今は養父なるシレヌス²の行方
 を失ひぬ、このシレヌスてふ老人は、醉眼朦朧としてさまよひ出でしが、田夫途にこれに遇ひ、その王ミダス³の許に運
 びゆきしを、ミダス王、十日十夜、款待至らざる所なく、第十一
 日に及びて、送りにて家に歸らしめ、彼の徒弟、今は其養子に託
 せられぬ。是に於て、バックス、ミダスに向ひて、王の欲す
 る所は、何にてもあれ、これを興へむといふ、ミダスは、わが觸

天 馬

るゝもの盡く黄金にならむことを願ひぬ、パックス、その願
 の今一きはよろしからざりしを悲むといへども、請ふがま
 ゝに王の心に任せぬ。ミダスは新に得たる力を喜び、之
 を試みむとて急ぎ去りぬ、さてとある樅樹の一枝さしかゝ
 れるを折り取れば、その枝手中にありて俄に黄金となりぬ、
 嬉しければまた石を拾ひ上ぐるに、これも忽ち燦爛たる純
 金となりぬ、芝草に觸るれば芝草黄金となり、林檎に觸るれ
 ば林檎はた一塊の黄金となる、讀者若しこれを見れば、必ずや
 彼がヘスベリデスの園に、件の菓物を偷みしかを疑ふなる
 べし。ミダス、欣喜雀躍家にかへり、奴婢に命じて珍味佳

肴をこゝのへしむるに、悲い哉、彼が觸るゝもの、一として黄
 金たらざるはなければ、黄金の麵包食ふに由なく、唇に近け
 ば物みな堅うおのが齒ににふれつ、されは滋味あれども味
 う事能はず、美酒あれども嘗むる事あたはず、想はざる苦難
 いとせむ術なう、今は却々にさきの願ひを誼へり、されど
 及ばず、彼は殆ど飢餓に瀕せむとす、こゝに金色もてきらめ
 ける兩手をあげて、救をパックスに求めぬ、パックスはもと
 より憐ふかければ、彼の歎願をきいて、

「パクトルスの河に至り、その源に溯りて、汝が首と
 脚とを入れ罪と罰とを濯ぎ去れよ。」

と教への。故れ、ミダスはバックスの教へのまに、河邊に赴き、その水に觸るゝや否や、化金の魔力は水に移りぬ。さてその眞砂は黄金となりて、今もなほむかしながらに残りこなむ。

さる程に、ミダスはいたく富貴と文飾とを厭ひ、去つて田野の神パンの崇拜者となりぬ。

ある時、パン、おのが音楽の技のいみじきを誇り、樂の神アポロに競技を挑みぬ。アポロまた之に應じ、山神トモルス判者となりぬ。トモルス、やかでその座を占め、聴くことの便りに、とて、耳より樹木をとり去りつ、さて信號につれて、パンは笛

を吹き初めぬ。その質朴なる調を、自らはいとよしと思ひぬ。ミダスはたこゝに來ぬはせてありしが、これも亦満足の意を表しつ、かくて、その調終るや、トモルス、頭を日神アポロの方にむけたり、この時彼の樹木もことごとく同じ方にむかひぬ。アポロはバルナヌス山の桂樹して作れる冠を戴き、シリアン紫色の衣ながう地に曳きつゝ、進み出でぬ。乃ちライル(琴)を左手に、右手を絃ヒキにふれてすががけば、くすしき妙への響指につれて起りぬ。恍惚として調に酔ひたるトモルス直に判じて、論なう勝利は琴の神に宜られぬ。ミダスの外は皆りの公平なる判に伏しぬ。されどミダスは異議を挟みて、

トムルスの特賞を得ずと詰る、アポロこのなめげなる詞を怒り、彼の耳人間のに相當しからざればとて、その長さを増し、内外に毛を生せしめ、根元より容易う動く事を得しめ給ひぬ、彼が耳は驢馬のと變せしなりけり。

ミダスはかゝる不幸にあひて、大に不運を悲みしが、今は力なく、大きやかなる頭巾もて自ら醜をおほひぬ、されど、いつしか理髮師の知る所となりければ、かたくその口外を禁じければ、彼が驢耳を有すてふ風聞、直にかくれなう廣よりぬ、こゝに於てか、彼いたく耻ぢ、牧場に至りて地に穴を穿ち、つゐるてその物語を囁き、そのまゝ上より

りける程に、この牧場に腹生ひ出で、日を経るまゝに伸びまさりつゝ、軟風そよぎ渡ることに、葉分の聲は自らありし世の事語ると聞えて、今も怪しう響くとなじ。

總叙

羅馬人の神

オフィヂウスの開闢説



JUPITER

口を開けば則ち桂の冠とひい受の矢といふ皆是れ希臘羅馬の神話より
來りし故事に非ずや元來西歐の文學美術にして古神話を題目とせりし
の多きは苟も指を藝術に染むる儕の夙に知了する所此を解せざれば
また西歐の藝術を談すべからずと言むも決して過言に非る也しかるに
坊間未だ一部の毒としてこれを紹介したるものは實に一大缺點と
言ふべし本店茲に見る所あり編者に希臘羅馬神話梗概の叙説を乞ひ優
美前位の各篇を採み敢て文學家美術家の座右に致す釘裝の美絕妙絶な
るは編に弊店の得意とする所若し文章に至りては雅馴流暢趣味津津と
して卷を捲ふに逸なかるべし獨り文學美術家の好材料好題目たるのみ
ならずその泰西思潮の淵源たるを健全高雅なる物附なるに於て亦之
を一般人士に推奨し家庭の讀み物として父兄に薦むるに躊躇せざる也
希くは愛買を給へ



JUPITER.

總 叙

希臘、羅馬の住民は、所謂アリヤンの血脈に屬し、共に北印度の高原より移住し來れる民族なるが如し、この西方へ移り來し種族は、殊に快活なる戶外の自然を樂み、自然の勢力を擬人することを好みしものゝ如し。

羅馬人の性情は、その先民なるエトラスカン人の如く詩的、空想的にはあらざりき、否寧ろその活力は實際的方面に發達したりき、さればその拜せし神に至りても、彼が獨創のもの誠に少く、神話の如きは、羅馬人よりも多く遊戯を好み、空

1 Delphi

想富瞻なりし希臘人に待つところ多大なりしなりき、彼等希臘人は、實に埃及および東邦諸國の傳説神話をさへ拉し來りて、おのが模型中に鑄造し去りしなりけり。これ等の神話傳説を、明断に解せむとせば、勢ひ彼等の間に信せられたる宇宙構造の一斑をも知了せざるべからず、されば今こゝに彼等の詩人技術家を通じて抱持せられたる思想の梗概を摘記すべし。

希臘詩人思へらく、地は扁平にして彼等の國はその中央に在り、しかもその中心たるべき所は、神たちの住みたまふてふオリュムプス山の、音に聞ゆる神壇のあるところ¹デルフイ

是れなるべしと。

又、この平圓なる地は、西より東へ、海水によりて二分せらる、即ち地中海²これにして、ユークザイン海³即ち黒海もこれに續くものなりとせり。

又思らく、大地の周圍にはオセアン⁴河流る、西方は河水南より北へ流れ、東方は北より南へ走る、さて其の流るゝや、毫も暴風烈颯に激せらるゝ事なく、確實に同じ速さもて走り行き、なほ地の海さては總ての河水、皆その水をオセアン河⁵より受くるなりと。

又思へらく、地の北方には愉快逸樂なる種族住せり、ヒベル

- 2 Mediteranean
- 3 Euxine
- 4 Ocean
- 5 Hyperboreans

ホレア人は是れなり、彼等はそゝり立つ山の彼方に、永遠の幸福と渝りなき青春の裡とに生活す、この高山の洞穴よりぞ、ヘラス(希臘人)を震はす寒冽の北風は吹き來なる。彼等には病なく、老年なく、勞苦なく、はた戦争なし、ムアーは、その『ムンボレアンの歌』に咏すらく、

I come from a land in the Sun-bright deep,

Where golden gardens glow,

Where the wind of north, becalmed in sleep,

Their conch-shells never blow.

と、地の南方には、オセアンの流に近く、幸多くして位高き人

民住せり、その名をエーチオビアン人と稱す、神の彼等を愛する事深く、時にオリムプスの宮居を出で、彼等が犠牲に宴會に赴き列りたまふとぞ、

地の西端オセアン河に沿ふ所に幸福の野あり、エリジアンの原と呼び、其處に住する人民は、神たちの恩愛いと優渥にして絶えて死といふことを知らず、とはに幸福を娛ひべしと、さればまた是の地を稱して、『幸福の野』とも、『天福の島』ともいふなり。

これに由りて是を觀れば、古代希臘人は、地中海岸及び彼等の國の東方、さては南方少數の人民を除きては、殆ど他を知